

平成 26 年度

弘前大学生涯学習教育研究センター年報

第18号

平成 27 年 5 月

弘前大学生涯学習教育研究センター

目 次

挨拶 弘前大学生涯学習教育研究センター長 曾 我 亨

I. 論文等

協同性を捉える視座

—キャリア教育の展望と大学開放との関わりで—

弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授 藤 田 昇 治…… 1

「こども映画教室@ひろさき2014」実践報告

弘前大学地域社会研究科院生・NPO法人harappa事務局員 太 田 尚 子…… 13

II. 事業報告

1. 生涯学習教育研究センター主催・共催事業

事業報告・アンケート集計結果…… 21

2. 学部・大学院の主催事業など

人文学部…… 57

医学研究科…… 59

理工学研究科…… 60

農学生命科学部…… 62

地域社会研究科…… 63

白神自然環境研究所…… 64

附属図書館…… 66

COI研究推進機構…… 67

事務局…… 70

III. センター関連規則など

1. センター関連規則…… 73

2. 機構・組織…… 77

3. 地図・連絡先…… 78

編集後記

生涯学習教育研究センターの新たな挑戦

弘前大学生涯学習教育研究センター長

曾 我 亨

平成26年度、弘前大学は文科省がすすめる「地(知)の拠点」事業に選ばれました。これは自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学等を支援するための事業で、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ろうとするものです。事業採択を受けて弘前大学では、学長が「地域志向」大学改革宣言をするなど、これからも「世界に発信し、地域と共に創造する」ことをモットーに、より一層、地域に貢献する大学であろうと決意を固めています。

とくに産業基盤が脆弱な青森県では、若年人口の流出、高齢化の進行、地域コミュニティ機能の低下など、多くの問題を抱えています。弘前大学は、地域コミュニティにとって真に中核的な拠点となるべく、青森県が抱える3つの課題(人口減少の克服、短命県の返上、食でとことん)の解決や、弘前市が掲げる住民参加型社会の実現に寄与していこうとしています。

生涯学習教育研究センターも「地(知)の拠点」事業と連携しながら、地域と大学をむすぶ窓口として、これまで以上に地域連携を深めていきたいと考えています。平成26年度は、地域で実践的な活動をしておられる方々や専門家の方々を後押しするような事業に重点をおいて活動をしてきました。これらの実践者・専門家を梃子にして、地域の未来を共に作っていききたいと思っています。

さらに平成27年度は、生涯学習教育研究センターの新たな挑戦として、より実践的なプログラムを作って参ります。現在、青森県にも総務省がすすめている「地域おこし協力隊」の方々が活動していますが、協力隊員に対する研修支援や、青森県が誇る世界遺産「白神山地」を活用した専門的プログラムなどを計画中です。また、新たな地域連携の担い手として、弘前大学の学生にも積極的に生涯学習教育研究センターの事業に参加して貰い、地域と大学をより強固にむすぶ試みもしていきたいと考えています。

地域の皆さんも地域づくりの主役として、積極的に生涯学習教育研究センターのプログラムにご参加いただけたらと思います。一緒に、地域の未来を創っていきましょう。

I. 論 文 等

協同性を捉える視座

—キャリア教育の展望と大学開放との関わりで—

藤田昇治

I. はじめに

グローバル化が進行する中で、日本経済は「円安」と「株高」で、一見好調な経済状況にある。しかし、昨年4月に消費税が引き上げられた影響は、未だに国民の購買力などに影響を及ぼし、実質賃金の低下傾向も続いている。さらに、「格差の拡大」が、経済・政治・文化・教育・福祉・医療などの様々な領域に現出している。

また、「地域間格差」も顕著となってきており、地域の再生をいかに図るのか、ということも大きな課題となってきている。

こうした中で「格差」の問題を考える上で、基本的には「生産手段の所有と非所有」から解き明かされるべきではあるが、この小論では、「キャリア教育」に焦点を当て、「地域再生」を図る課題も含めて、「地域課題に取り組む人材の育成」という文脈において、「大学開放」との関連をみすえながら、試論を述べてみたい。つまり、地域社会を活性化させる上で、経済的な活動の発展を目指しながらも、その経済活動の担い手を育成する課題との関連で「キャリア教育」について論点を整理しようとするものである。

まず、「キャリア教育」の基本的な視点として、「協同性」をどのような内容で把握するのか、という点から考察してみたい。企業や行政などで「労働」する際に、職場での、さらに「地域」での「協同性」をどのように考えるのか、という問題である。

また、「協同性」を個人のレベルで育むことの意義・重要性と、大学が果たすべき役割について検討してみたい。

「労働」について考察するに当たっては、「資本が指揮監督する労働」と「協同による労働」とを比較する視点を検討してみたい。

II. 「地域課題に取り組む人材の育成」という課題設定

1. 多様な地域課題と人材育成の課題

様々な地域課題・生活課題が深刻化する中で、個人のレベルでの努力だけでなく、社会的に対処して行くということを具体的に捉え直した場合、どのようなことが考えられるのであろうか。

確実に一部の大企業や中小企業では「円安」と「株高」の恩恵に浴している。しかし、この間進行してきた「グローバル化」や「少子高齢化」ともなう問題は深刻さを増すばかりである。「円安」は、輸入品の価格上昇に直結し、むしろ多くの国民・企業にとっては、経営・生活上の困難さをもたらすことになる。貿易収支の赤字幅も、「円安」になる

だけで自動的に拡大する。

「格差の拡大」が進行していることも否定しようのない事実である。『21世紀の資本』を引き合いに出すまでもなく、資本の収益性は労働者の労賃の上昇を上回る。雇用形態を見れば、非正規雇用が4割以上を占めているのであり、「子どもの貧困化率」は約17パーセントとされている。

「現象」としては多様に現出している地域課題・生活課題ではあるが、その克服の為に多様な取り組みが追求されていることも重要な事実である。社会教育・生涯学習の場面に限定しても、地域課題・生活課題の克服を目指す多様な取り組みが成されている。その基本には、「人材の育成」ということが掲げられている。また、公民館・教育行政・他の行政部局・企業・住民組織・ボランティア・NPO等の「協働」の取り組みが追求されていることも多い。

筆者としては、こうした実践について、以下で「協同性」という視点から若干の考察を行いたい、と考えている。

2. 社会教育と福祉における「協同性」

個人が直面している問題は、まさに個別的な条件に規定されて、多様な現象形態をもって立ち現れる。経済的な問題を例にとれば、「有名大学」に進学できなかったから大手の企業に就職できず、賃金水準の低い中小企業にしか就職できなかったとか、離婚したことにより女性が自立して働こうとしたが、資格や年齢制限などから、正規雇用では採用されなかった、等々である。しかし、そうした個別的事例も、個別性を捨象すれば、そこには社会的な必然性が見えてくる。「学力」ないし「学歴」による差別の問題や、不安定就労層を作り出している企業・行政の問題である。

こうした中で、地域課題を捉えることは、個人のレベルの問題であると同時に、社会的な問題である、という視点からのアプローチが必要となる。

ところで、今日、多様な地域課題・生活課題が深刻化しているが、様々な角度から「地域の活性化」や「地域再生」、「地域づくり」ということが取り組まれている。社会教育の場面では、公民館事業として、あるいは社会教育・生涯学習の目標として「地域課題・生活課題の克服を目指す人材育成」が掲げられている。

ここで、弘前市における公民館関係職員研修会について触れておきたい。

この間、弘前大学生涯学習教育研究センターでは、弘前市教育委員会と共催で、公民館関係職員を主たる対象とした研修会を実施してきた¹⁾。

この研修会の中で目標として設定されてきたことは、公民館職員としての専門性の質的向上である。それは、講師による講義とワークショップという形態で追求されてきた。このワークショップは、日頃の実践を踏まえて、具体的に今後の公民館活動に活かすという、実践的な課題設定をしたものである。したがって、参加者は、同じグループのメンバー（多くの場合は他の公民館の職員）と交流することで、自からが所属している公民館のこれまでの実践を振り返ったり、今後の実践に活かせる教訓・アイデア・ヒントなどを得ることができる。

こうしたワークショップは、優れて「協同性」を内在させた、共同学習という側面を持ち得る。地区の公民館活動を活性化させる、ひいては弘前市全体の公民館活動・社会教

育・生涯学習を推進していく、ということを経済目標とした実践の追求という意味での「協同性」である。こうした視点から、2014年12月に実施した「公民館関係職員研修会」において、和徳地区公民館が行った実践報告に注目したい。平成25年度に同様の「研修会」を実施しているのだが、その中で船沢公民館で取り組まれてきた「国際交流事業」についての報告が成された²⁾。

こうした実践に学んで、和徳公民館でも「国際交流」に重点をおいた実践に取り組んだ、というのである。弘前大学の留学生と地域住民が「国際交流」をするのが眼目だが、和徳公民館の取り組みは、子どもが事業の企画段階から参画し、また、他の子育て・教育に関わる団体と共催とする（そのことで、いわば外部資金の獲得にも成功している）といった点で、新たな発展方向を切り開いている、ということができる。

次に、地域生涯学習の推進ということに触れてみたい。

地域生涯学習の推進という課題については、公民館や図書館・博物館等の社会教育施設は勿論、教育行政以外の行政部局、地域の社会組織、ボランティア・NPO、さらに企業などが、様々な連携をしながら、一定の役割を果たすことが期待されている。同様に、民生委員の場合も、後に七戸町の実践例にも触れるのだが、筆者は民生委員が地域生涯学習を推進していく上で重要な役割を果たすことが期待されている、と考えている。

ここで、福祉の領域における地域課題・生活課題について考えてみよう。高齢化が進行する中で、地域によっては高齢化率が4割を超えるところも生まれてきている。65歳以上の人がすべて身体的・精神的にある種の「ハンディキャップを抱えている」と捉えるのは全くの予断・偏見ではあるが、現役から退き、何がしかの疾病を罹病している人が比較的多い、ということは事実である。脳血栓・脳梗塞などの発作の後遺症で「介護」を必要としたり、転倒により骨折して「寝たきり状態」になる人など、様々なケースがある。近年、予防の為に対策や効果的な薬の発見などが報じられてきているが、認知症患者の介護は、家族にとって大きな負担となっている。

こうした状況が進行する中で、「介護」を家族や個人の問題として捉えるのではなく、「社会的サービス」や「地域住民のサポート」によって対応しようとする考え方が広まってきている。周知のように、行政では「包括支援センター」が多様な事業を展開し、「介護保険法」の制度があり、ボランティア・NPOの活動も多様な展開をみせてきている。

とはいえ、すべての「要介護者」がそうしたサービスを受ける条件は整っているわけではない。「特別養護老人ホーム」の「待機者」が全国で70万人以上である、と報道されている。また、「老々介護」の状態にある家族も多い。

こうした状況にあって、地域において個別の家族の状況に即して、さらに住民一人ひとりの状況に即して、「福祉」の領域でサポートを必要としている人や家族とのつながりを持つことが、行政に求められている。

地域における民生委員の役割として、「住民の見守り」ということを挙げておきたい。今日、地域では、「家庭内暴力」や「不登校」、「ニート」、「貧困」、「介護」などの問題を抱えている家族が増加してきている。そうした家族のなかには、社会的なサポートを必要としながら「どのように手続きをすべきか分からない」という場合や、「サポートを受けることが可能であるという事実を知らない」、という場合もある。また、サポートの必要性を感じながらも、言い出せないでいる場合も決して少なくはない。最近では、生活保護の

申請を行政の窓口で直接行うようになってはいるのだが、地域の中で住民からの相談を受けたり、「働きかける」あるいは「見守る」役割が民生委員に期待されていることとして指摘しておきたい。

ここで、民生委員が地域の中で果たすべき役割について、社会教育・生涯学習に関連づけて触れておきたい。

筆者は、平成26年度に、七戸町教育委員会と弘前大学生涯学習教育研究センターの共催の事業として実施された「生涯学習講座」において、その講師をつとめた。主たる対象は民生委員で、民生委員として地域の中で果たすべき役割（期待されていること）を中心として講義内容を設定した。その中で、結果として「地域福祉」の領域で民生委員に求められる役割を確認するだけでなく、むしろこれからは地域課題・生活課題の克服を視野に入れて「地域づくり」を展望していく、そのための実践をしていく必要性について述べた。

七戸町に限らず、周知のように地域では、産業・医療・保健・教育・文化・福祉など、様々な領域で、多くの課題が存在している。筆者は、「現代的貧困」の諸側面として、生活習慣病、「社会的排除」の動向（「格差」や「ハラスメント」という形態での「社会的排除」）、「貧困児童」、「アルコール依存症」、「ギャンブル依存症」、「ニート」等々を捉えている。

こうした状況を生み出す要因が社会システムの中に存在するということが明確にし、その克服を目指す為の実践が必要とされてきている、ということである。また、民生委員個人としての理解とともに、多くの住民とともに「共同学習」を行う（住民一人ひとりの学びを育むと共に、課題解決にむけて行政や社会組織・企業・ボランティア・NPOなどと広範に「協同」できる条件づくりを図る）ことが求められている、ということである。

次に、認知症患者の徘徊について、地域的な連携の下に対策が取られている事例に触れておきたい。釧路市では、一旦家族から「認知症患者が徘徊をしている」という連絡が警察になされると、地域住民、地域FM放送、ガソリンスタンドなどに一斉に伝達され、それぞれが身の回りで徘徊している人の発見に努力する、という体制が構築されている³⁾。

こうした連絡体制が構築されることを可能とした条件には、認知症患者の生命に関わる事態が予想・危惧される場合には、個人情報共有することで社会的に対処することができる、という合意を形成していることが挙げられる。一般的には、個々の認知症患者について、氏名・性別・身体的特徴・服装等々を公開することはできない。警察に「行方不明」という届けが出されても、それをそのまま地域に公開することはできないのである。しかし、認知症患者の徘徊の場合、側溝にはまって身動きできなくなり凍死してしまったという事例や、踏切などで事故死する、という事例などが生じている。「手遅れ」になる可能性も決して少なくはない、という状況にある。

このような釧路市の事例を、「認知症患者の徘徊に対処する」という共通の目標の下に、地域住民、住民組織、行政、企業、NPOなどが「協同」しているものとして捉えたい。

Ⅲ. 「協同性」を基本とした「社会参加意識」の涵養

1. 「協同」概念の検討

今日、私たちの生活が様々な「協同」によって成立してはいるのだが、その基本的な性格が見えにくくなっている。即ち、「商品経済」が全社会的に普及する段階にいたり、社会の基本的な仕組みとして「共同社会」という本質が隠蔽されていくことになる。消費者と生産者は完全に分断されていく。もっとも、最近では、農業生産者が直接消費者と農産物を売買することも可能となり、また、実践しているケースも多いのだが。

「商品経済」が高度に発展することで、「富の源泉が労働である」ということも見えにくくなっている。同時に「富」はすべて「資本」が生み出すものとして捉えられるようになる。

ここで、協同組合について触れておきたい。

「協同組合法」にもとづいて組織されているものとして、「農業協同組合」と「漁業協同組合」について考えてみたい。いずれも、「小生産者」の協同組合で、組合員の生産と消費に関わる事業を実施している。

「購入」、「販売」、「信用」の事業が中心である。「購入」は、組合員の生産・生活資材を共同購入することで少しでも安く購入しよう、という取り組みである。「販売」は、組合員の生産物を共同販売することで、個別で「仲買人」などに対応するよりも経済的な利益を得ることができる、ということで追求されてきた。今日では、例えば米という生産物・商品についてみると、むしろ個人的に業者や消費者と取引した方が高額で販売できる、とする農家が増えていることも事実である。しかし、市場への対応などでは、「一元集荷」することで市場での価格の安定を保つことができている、という側面があることも否定できない。

ここで、「協同」と「協働」、そして「共同」の概念についての整理を、この小論との関連で簡単にしておきたい。

「共同」とは、同一時間ないし同一空間で、一緒に作業を行う、あるいは共通の目的にもとづく取り組みを行うこと、として捉えておきたい。例えば、様々な団体・組織が実行委員会などを組織し、共催でイベントを実施するという場面が考えられる。「祭り」や「フェスティバル」、「観劇会」等々が考えられる。その場合、「受付」や様々な役割が必要とされてくる。また、事前の広報活動なども必要とされてくる。こうした作業を一緒に行う、というものを「共同」として捉えたい。また、介護の場面において、リハビリを行う場面でみれば、患者と医療スタッフとの「共同作業」として作業療法が取り込まれる、ということである。

「協働」は、それぞれ独立した組織・団体などが、限定された共通の目標に対して、それぞれの組織・団体の独自性を保持しながら協力し合う、という意味合いで捉えたい。いわば、できる範囲内での協力である。具体的な場面として、「食育」について学校・医療機関・住民組織・保健行政などが「連絡協議会」などを組織し、情報交換やイベントを共催し、そこで「協力」し合う、ということである。部分的には「共同」を含むこともあり得るが、「共通の目標・目的に向けた一過性の強い協力体制」として捉えたい。

これに対して「協同」とは、個人・組織、団体の枠を越えて、広く「共通の目的・利害

関係」の下での「協力体制」として捉えたい。詳しくは後述するが、様々な「共同」を含み、「協働」を持続的に追求する取り組み、ということである。社会的に法律に準拠した組織である、農協や漁協が「協同組合」という名称を持つことの意味が大きい。様々な条件によって「協同」を成立させる「場」も異なるのだが、政治・経済・教育・文化などの場面で、いわば社会システムを再構築していく論理の中に、その基本的な価値規範・行動規範を構成するものとして位置づけたい。換言すれば、今日様々に展開されている、企業や行政・住民組織・NPO等の組織活動の原理として「協同」を位置づける、ということである。

2. 労働・生産・生活と「協同」

労働・生産・生活過程に即して「協同」を捉えた場合、歴史的にはロバート・オーエンの取り組みなどがあるのだが、また、日本の場合には戦前の産業組合などの実践もあるのだが、ここでは次の点について検討してみたい。

(1)労働・生産・生活過程における協同の捉え方

日本社会は資本主義社会であり、基本的に個人所有の資本による経営がなされている。生産・流通・情報・金融などの様々な部面で、企業の下に労働過程が組織されている。したがって、基本的には、企業（資本）によって編成された「労働過程」に、個人は自らの「労働力商品」を売り、そこに組み入れられる形で「労働」に従事することになる。人事課といったセクションが行う「評価」にもとづき、企業が組織する「労働過程」への編入がなされるということであり、多少は個人の希望や家庭の事情などが考慮される事はあるとは言っても、あくまでも企業の命令には逆らえない。「労働過程」のなかで、実際に「労働を遂行する」場面では、個人の工夫や発意が発揮される場合もあるが、企業の体質や業種などによってその自由度は大きく異なってくる。

このように、「資本」の指揮監督の下での「労働」が支配的であるのに対して、労働者が主体となって「協同組合」を設立し、事業展開する事例（即ち「労働者生協」）が生まれてきている。

「労働者生協」の可能性としては、労働者一人ひとりの主体性が、より具体的にはアイデア・創意工夫などの活用が、「協同」によって高められる、さらにより充実した「働きがい」を得る可能性がある、ということが重要なのである。

「労働者生協」について事業体として考えた場合、一般的な企業と比較して、当然ながら「経営体」としては、一時的に「赤字」が許されることはあっても、基本的に「赤字経営」であれば存続することはできない、という意味では全く同じである。しかし、一般の企業と異なるのは、「利潤」を節減できるところに大きな特徴がある。これは、NPOにおいても同様である。基本的に、労賃は企業活動を展開する上では必須の、いわば「コスト」を構成しているものである。原材料費や光熱水費など、あるいは不動産・施設等の投資・維持管理費と同様である。これに対して企業家を得ることができる「利潤」は、「コスト」ではない。企業活動の結果として得られる「利潤」であって、事業展開の如何によってその大きさは異なってくる。社会的な「平均利潤」が得られない場合には、資本の引き上げがなされる。「平均利潤」が、あるいはそれに近い水準の「利潤」が得られる限

りにおいてのみ、企業活動は追求される。しかし、企業家にとって、より多くの「利潤」が期待される条件が整えば、それまでの投資場面から資金を引き上げて別の場面で投資することは頻繁に行われていることである。

今日では、「利潤」が株主に配当として振り向けられる。社長や重役への給与・役員報酬は、概念的には「利潤」から充てられるものであるが、賃金と同様の「コスト」とみられがちである。

とはいえ、「労働者生協」は「利潤」を節約できる、ということが、第一の大きな特徴の一つである。

第二に、「利潤の節約」とも関連して、労働者の賃金水準を社会的平均よりも高く設定する可能性がある、ということも考えられる。実際には、賃金を社会的平均の水準で支払うこともままならない、というのが「労働者生協」の実態ではあるが。

第三に、労働過程の編成を、労働者が主体的に行うことが可能である、ということがある。その前提として、個々の労働者の主体性が問われることになる。合理的な「労働過程の編成」を行う上では、指揮監督する立場の者だけが合理的な「労働過程の編成」に責任を持つ、ということでは成り立たない。関連して、筆者は「トップダウン式の管理」の問題点について触れたことがある⁴⁾。

(2) 企業活動と協同性

今日の企業の実態としては、資本金（株式）が社会的に共有されている場合が多く、さらに、銀行や他の企業が株式を保有する、ということも多い。

一方、個人経営で「株式会社」を名乗る場合も多い。以前と比較すると「ベンチャー企業の育成」という文脈から、「資本金」が少額でも株式会社を設立することが可能になっている⁵⁾。

資本主義社会では、基本的に「市場経済」の論理で運営されている。政策的に誘導・調整される場面もあるが、基本的には「理念型」として「市場原理」が根底に据えられている。しかし、実際には、金融資本の果たしている役割や、企業同士の「持ち株制度」、業界における「取り決め」等を考えた場合、完全な「自由競争」になっている訳ではない、ということも事実であって、部門によっては行政の積極的な関与がある例も多い。

このような企業間の「協同」は、「労働の社会化」⁶⁾の高度に発達した今日の資本主義の実体を構成している、と捉えることができよう。

ところで、「生産」が、様々な「生産物」を結合する形で編成され、その「生産物」もグローバル化した中で取引される、換言すれば生産過程のグローバル化の進行が顕著である、ということができよう。また、原料の輸入やエネルギー源の輸入が顕著である。とりわけ「東日本大震災」以降、原発が停止しそれをカバーする形で火力発電を稼働させることから、原油・液化天然ガスへの依存が高まっている。本来ならば、「持続可能なエネルギー」の積極的な開発が政策的にも重視されるべきところであるが、現状では「電力会社による電力の買い取り」も、実効性の乏しいものとなっている。

あるいは、世界的な広がりの中各地から部品を調達して製品を作る、という傾向も強まっている。かつてのように、国内で一つの企業がすべての部品を生産するというこ

は、家電などでは少なくなってきた。

こうした事態の進展に、「協同性の進展」という側面を確認することができるのではないか。

(3)「生活過程における協同」

これまで「労働過程における協同」や「生産者の協同」について述べてきたが、さらに、「生活過程における協同」について考えてみたい。

今日、個人が孤立する傾向が強まっている。地域社会の「共同体」としての機能の低下は顕著である。かつて、農業を主要な生業とする地域では、「村落共同体」的な「コミュニティ」が存在し、住民同士の「協同」及び「共同作業」が様々な場面で追求されていた。

都市部では、さらに多くの個人が孤立した生活環境にある。「商品・サービス」は、貨幣で購入し消費する、という生活様式になっている。社会的には「共同事業」としての性格が強い「育児」や「教育」も、「私立の教育施設」の場合には運営する企業体との「契約」ないし「サービスの購入」として捉えられがちである。自治体として運営されている「警察」や「消防」といった事業でさえ、その「協同性」（地域住民が共同事業として組織・設置したものである、という基本的性格）が見えにくくなっている、といえるのではないか。

とはいえ、生活を営む上で、住民同士の協力は多様な形態・内容で今日なお多くの地域・生活場面で展開されている。例えば、今日では、「子育て」など共通の課題に対して、「子育て期」の保護者を中心とした、「協同」を追求する様々な実践も生まれている。ボランティア・NPOの活動も活発に行われている地域もある。また、町内会や老人クラブなどのように、歴史的・社会的に組織化されてきたものもあるのだが、個人の自由意志において成立している「共同」や「協同」も少なくはない。新しい人間関係の構築が社会的に追求され、その中で「協同」が具体的に展開されている場合もある。今日、SNS等を利用した「共通の行動の組織化」も広範に展開されている。例えば、選挙の際の投票行動や集会・デモの呼びかけがなされ、実際に実施される例も増えている。

福祉の領域においても、様々な「協同」が追求されるようになってきている。先に釧路市の例も紹介したが、例えば認知症患者が徘徊した場合、その早期発見と保護を、住民組織・行政・企業・NPO等が「協同」で対処する、というものである。

これまで述べてきたことをふまえて、協同組合運動の重要性・意義について、次の点を指摘しておきたい。

第一に、労働過程・生産過程・生活過程のどの領域においても、協同で取り組むことで、自己の「労働力の水準」を「社会的平均」に維持し、さらに向上させることが可能になる、という点である。

生活協同組合の場合には、「消費者」という立場での「協同」になるが、そこでも「消費生活」を協同で営むということから、生活の営みに関する情報の共有や商品を購入し、消費するという生活の営みにおいて、一定の「社会的平均」のクオリティを実現することになる。例えば、「無農薬」や「低農薬」の農産物を共同購入する、ということでの「生活の協同」であり、「社会的平均化」されることの意味は大きい。勿論、全社会的なレベ

ルでの「社会的平均」に一直線になるわけではないが、「無農薬の農産物」を志向する人々を対象とした「市場」の成立を可能とする。

第二に、「経営」が資本の下に組織される場合には、「利潤」の追求が何よりも求められるのだが、「労働者生協」の場合にはそれを一定程度コントロールできる、という点である。「資本金」や銀行からの「借入金」を、組合員の「共同出資」が代替することで、金融資本を含めた出資者への「利潤の配当」は、基本的に節約できる。同時に、「利潤を追求することが協同組合の第一の目的ではない」ということから来る、労働条件や商品の扱い、等々（労働過程の編成、労働条件、提供するサービスなど）へのコントロールが可能となる。「名ばかり店長」や「ブラック企業」、さらに「詐欺商法」などで端的に現れる、「むき出しの利潤追求の弊害」は、基本的に克服することが可能となる。勿論、全社会的な資本の展開から完全に自由になる、ということはある得ない。労賃水準や扱う商品・サービスの品質や価格も、「全社会的」運動の法則からは抜け出せない。

第三に、労働・生産・生活過程の「協同」が、様々な場面で、企業や行政・社会組織・ボランティア・NPO等と「協同」する可能性を持つ、ということである。先にも触れたように、「社会的協同性」が見えにくくなっており、そのことは「商品経済」が高度に発達した今日で見えにくくなっているのだが、労働・生産・生活過程の「協同」を経験することで、「社会の本質的な協同性」に気づく可能性を内在させたものとなる。

IV. 教育における「協同性」と「大学開放」

1. 教育問題と「協同性」

教育という営みについて考えた場合、家庭教育・学校教育を中心に焦点を絞っても、今日では多様な問題が生じている。その中で、「不登校」について若干検討してみたい。

周知のように、小学校高学年生から「不登校」になる例が増加し、中学生では3パーセント近くが「不登校」になっている、と言われている。

こうした状況を作り出す要因を考えた場合いくつかの要因が考えられるのではあるが、この小論との関連で、以下の点について触れておきたい。

第一に、児童生徒の「社会性」を育む社会的条件が問題なのではないか。

コミュニケーションを育む集団の遊び、ルールのある遊びが少なくなっている。

地域での「子供会」などの集団が解体していることの影響も大きいのではないか。

第二に、「遊び」そのもの「質」の問題も考えられる。TVゲームのように、「一人遊び」の比重が大きい、という問題である。また、ゲームソフトやTV番組のコンテンツの問題が、他者との交流を促進したり他者への思いやりを育む、といった内容が少なくなっているのではないか。対極に、攻撃的な内容や激しい暴力的な表現のものが増加してきているのではないか⁷⁾。

第三に、家庭内の問題が深刻化してきている側面も重視する必要がある。「貧困な家庭の状況にある児童」が約17パーセントとなっている。その原因も様々に考えられるのだが、結論として「親子関係」に課題を持つ家庭が多数ある、ということが考えられる。勿論、「貧困」であればすべての家庭で問題が生じる、ということではない。経済的・社会的要因が、子どもの「不登校」に作用している可能性が高い、ということである。

第四に、学校での「先生－生徒の関係」の問題である。その前提に、「先生」に余裕がなくなっている、という問題がある。児童生徒の「心の変化」（いじめられることで生じる生徒の心の変化）を、たとえ様々なサインが示されても、それを受け止めきれないでいる、余裕をもって児童生徒を見る・受け入れることができにくい状況にある、ということが指摘できるのではないか。

第五に、「不登校児童」への対応の在り方の問題である。学校側は、基本的にもとのクラスに復帰することを第一目標としている。それが困難な場合、保健室などの、他の生徒と接する機会が少い場面での登校を追求している。

しかし、一旦「不登校」になった場合、家庭において「ひきこもり」状態になると、「保健室登校」も高いハードルとなってくる。

こうした状況にあって、何らかの「社会参加」を図ることが必要になってくるのだが、「フリー・スクール」の取り組みが一定の成果を上げていることに注目したい。

2. 「大学開放」に期待されているもの

これまで、労働・生産・生活過程における、様々な「協同」について述べてきた。キャリア教育に引きつけて考えた場合、こうした「協同性」をふまえて知識・技能の修得や、労働過程の合理的編成を組織できる能力の修得、ということが課題となる。生活過程の場合には、孤立した個人の生活の「枠」の狭隘さということで問題を捉えるのではなく、換言すれば、問題を個人のレベルで矮小化して捉えるのではなく、社会的に解決すべき課題として捉え、そうした文脈の中で課題解決を図る、ということである。

大学に期待されていることは、第一に、課題の所在を明確にする、ということになる。医療・保健・産業・教育・文化・福祉等々、様々な領域における研究により、多くの人々には多様な「現象」として見えるものの本質に迫った、課題解決の方向性を示すことである。

第二に、多様な技術開発を行うことである。近年、「知識基盤社会」の下では、「知的財産」にシフトした研究・技術開発が推進されている。確かに、日本の将来構想としての「技術立国」を引き合いに出すまでもなく、1億人以上の人口が「食べていく」ためには、常に多様な技術開発が求められるところである。社会的にみれば、企業において多額の資本が研究・技術開発に充当されているが、「社会的生産と私的所有の矛盾」に起因する問題を抱えている⁸⁾。今後、中小企業の活躍が一層期待される中で、研究・技術開発力に制約が多い中小企業と大学の連携・協働は、より切実な課題となるのではないか。さらに、商品・サービス・システムの開発を考える場合、個別企業の「利潤」だけでなく、地域の産業構造・労働力市場、さらにグローバルな市場も（さらに言えば「貧困の克服」ということも含めて）見据えた、大きな構想力に基礎づけられたものが問われているのではないか。

第三に、人材の育成ということである。学部・大学院において、多くの「人材」の育成を図る役割を、大学は社会的に付与されている。「COC」の取り組みも重要な課題となっているが、高等教育機関が社会的に期待されている、重要な役割の一つであることは間違いない。

「大学開放」について言えば、上述の3つの役割は、大学の中だけでなく、広く地域・社会に開かれた状況の中で追求される必要がある、ということである。

V. 結び

「協同性」という用語は、必ずしも多くの人々に認知されているものではない。社会教育・生涯学習の領域においても、「協働」という用語・概念は一般化しているとしても、「協同性」については耳なじんでいる人は少ない、と考える。

しかし、敢えてこの小論で「協同性」について考えてみようとしたのは、一人ひとりが孤立化する傾向が強まる中で、その克服を目指す論理をどのように構築していくのか、という問題意識が強かったからである。率直に言って、その意図が十分果たせているとは思わないが、「協同」する意義・必然性について考える第一歩を踏み出した、と考えている。

今日、「グローバル化」や「少子高齢化」が取り沙汰され、地域課題・生活課題の克服に向けた取り組みも多様に展開されている。その場合、そうした課題解決を志向する論理・基本的な価値観に据えられるべきものは何か、ということを考えてみることも意義あることではないだろうか。

以上の問題提起をすることで、「結び」としたい。

〈注〉

- 1) この点については、共同研究を行い、同時に公民館関係職員研修会で講師を担当してきた、富山大学の藤田公仁子が触れているので参照されたい。藤田公仁子「公民館と連携した『大学開放』の可能性を探る」(『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』、第16巻、2014年)。
- 2) 詳細については、久保田節子「世代間交流から国際交流へ」(『弘前大学生涯学習教育研究センター年報』、第17号、2014年)を参照されたい。
- 3) NHKスペシャル「認知症800万人時代 行方不明者1万人～知られざる徘徊の実態～」(2014年5月11日放送)。
- 4) 拙稿「大学の社会的役割と『大学開放』」(『弘前大学生涯学習教育研究センター年報』、第17号、2014年)を参照されたい。
- 5) そのことは、結果として、「ペーパー・カンパニー」の大量創出をもたらし、様々なトラブルを生じさせる要因の一つとなっている。また、「税金逃れ」に利用されている実態も見逃せない。「ペーパー・カンパニー」に受注をふりわけ、「分割発注」の体裁をとることで、消費税の納入を回避しようとする動きである。
- 6) 「労働の社会化」ということについて考えてみたい。労働・生産過程が、個人の職人的な孤立した状況から、工場生産のように多数の、そして有機的な労働編成の形態を取って労働が行われる、という側面から捉えることができる。そこでは、労働手段や労働力、生産過程に充用される技術の高度化・装置化、ということもより顕著になってくる。企業・工場における、同時に多数の労働者が他者と連携して労働・生産を行う、という意味である。

次に、多くの企業間の連携(原料生産や燃料の提供、作業機械の提供、等々)が大規模化する、という側面である。農林水産業の生産場面においても、農薬などの生産財、各種機械(農業であればトラクター、田植機、乾燥機などの機械・装置、漁業であれば魚群探知機、集魚灯など)が社会的な分業の下で生産が行われるようになり、

生産物・漁獲物が、冷凍保存されたり、様々に加工される、というように社会的な生産と密接に結合している。さらに、外食産業との関わりも、「契約栽培」などとして展開されている。流通過程に目を向けるならば、トラック輸送などの搬送システムが高度化し、スーパーなどの商業資本の展開を支えている。こうした具体的な「社会化」の姿は、「お金」を媒介して行われており、「商売」という姿で人々の眼前に現れる。

- 7) クローズアップ現代「逆襲なるか日本アニメ」(2015年2月23日放送)では、かつて日本のアニメが世界市場で大きいシェアを占めていたのだが、多くの国で規制が強化され、それに対応しきれない状況が報じられている。いわば「世界規準」からすれば、日本のアニメには、問題のある表現やコンテンツのものが多く、という評価になっている、ということである。
- 8) 「社会的生産と私的所有の矛盾」をめぐっては、次のような報道がある。平成27年2月15日「ニュースサキ取り『目を覚ませ！休眠特許』」では、同じ企業の中で、部署が異なることに起因する、技術の「埋没」の問題が取り上げられている。また、平成27年3月2日「クローズアップ現代」では、「“埋没技術”を活用せよ」というテーマの番組の中で、特許を保有する企業とは異なった企業が、新しい発想の下に商品開発していく可能性・実践例を紹介している。いずれの番組も、多様な技術開発により多くの特許を取得していながら、それを商品化できないでいる状況を取り上げている。こうした事例の根源には、「社会的生産と私的所有の矛盾」が存在している、と筆者は捉えている。

「こども映画教室@ひろさき2014」実践報告

太田 尚子

I. はじめに

NPO法人harappaは、2002年に弘前市吉野町の煉瓦倉庫で開催された奈良美智展でのボランティア団体をきっかけに、2003年に創立。定期的にアーティスト支援の視点から、展覧会やワークショップなどを開催している。特に、2008年から開催しているharappa映画館や、弘前市との「アートスペース創出事業」など、弘前市内でのアート・文化に関わるイベントを多数行ってきた。筆者は自身の研究も含め、2013年からharappaで活動している。今までたくさんのイベントや事業に関わらせていただいていたが、今回は、2014年に開催した「こども映画教室@ひろさき2014」に関して報告する。

harappaでの平成26年度の活動は、今までにも増して、こどもたちに向けての活動が多かった。今回、報告する「こども映画教室@ひろさき2014」の他にも、26年度は、「こども映画館」「こどもアート万博」など、こどもたちに向けた活動を多く展開した1年となった。今までの活動は弘前市民に、アート、文化を楽しんでもらう機会、環境を提供することが主であったが、近年では、弘前市民の中でも、特にこどもたちに、アートや文化を感じてもらい、楽しむ習慣を身に付けてほしいという想いが、活動に強く出ている。

今回は、「こども映画教室@ひろさき2014」の報告とともに、こどもたちに、アートや文化により多く接してもらおう為の、今後の活動の展望についても考えていきたい。

II. 「こども映画教室@ひろさき2014」

1. 概要

「こども映画教室」は2004年に金沢で始まり、毎年、映画の仕組みをわかりやすく体験するワークショップやさまざまな名画の鑑賞を通して、次世代の文化を担う想像力豊かな子どもたちの育成を図ってきた取り組みである。これらの活動のノウハウを活かし、横浜や相馬など、各地で「こども映画教室」が開催されている。今回は、青森県との事業である「映像芸術を通じた子ども・若者の芸術文化活動支援事業」の一環として、「こども映画教室@ひろさき2014」を開催した。「こども映画教室」代表の土肥悦子氏をプロデューサーとして迎えた他、特別講師には、青森市出身の映画監督・横浜聡子氏を迎え、脚本づくり、撮影、編集をこどもたちだけで行い、3日間で映画をつくり、最後にはご家族を招いて上映会も行った。

弘前市内の小学校を中心に、募集フライヤーを配布し、参加者を募集したところ、21名の参加者が集まり、学年・性別・小学校を考慮し、各班5～6名の4つの班分けを行った。

開催日時：2014年7月25日(金)～27日(日)

作業会場：弘前市緑の相談所

撮影場所：弘前市中心市街地各所

上映会会場：弘前中央高校講堂

参加人数：21名

当日スタッフ：17名

2. 実施スケジュール

〈1日目〉

9：00 受付開始

10：00 開始・イントロダクション（監督・スタッフ自己紹介）

10：20 アイスブレイク（外で体を動かすゲーム）

11：15 横浜監督からのお話（今回の映画づくりについて等、5W1H遊び）

12：00 昼食（チームごとにお弁当）

13：00 シナリオづくり

16：00 まとめ・報告（各チームごとに今日の報告）

16：30 1日目終了

〈2日目〉

9：30 受付

10：00 朝の会（今日の流れを確認、各チームの状況確認）

10：15 撮影（チームに分かれて適宜撮影開始）

12：00 昼食（各チームごとにお弁当）

13：00 撮影

16：00 まとめ・報告

16：30 2日目終了

〈3日目〉

9：30 受付

10：00 朝の会（今日の流れを確認、各チームの状況確認）

10：15 編集作業、ポスター・チラシづくり

12：00 昼食（各チームごとにお弁当）

13：00 編集作業、ポスター・チラシづくり

14：30 作業終了、確認

15：00 会場移動

15：30 上映開始（各チームごとに舞台挨拶）

17：30 上映会終了・解散

3. サポートスタッフについて

各班には、撮影や編集作業など、技術的な面をサポートするスタッフ1名と、こどもたちの様子や時間配分などを管理するスタッフ1～2名がつき、こどもたちのサポートを行った。サポートスタッフには、「こどもが好き」「映画が好き」という条件で募集した弘前大学の学生スタッフが5名参加してくれた。

サポートスタッフは、顔合わせと注意事項の確認などの為に、事前に2回の打ち合わせを行った。

4. レポート

〈1日目〉

1日目は、こどもたち、大人スタッフのみなで、アイスブレイクのゲームをした後、各班に分かれて、改めて自己紹介を行った。こどもたちも、大人スタッフもみんなに呼んでほしいニックネームを決め、「5W1Hゲーム」などを通して、次第に賑やかになってきた。横浜監督から、今回の映画づくりのテーマは「ひみつ」という発表があり、各班で「ひみつ」にまつわるお話づくりが始まった。はじめは少し緊張していたこどもたちも、アイスブレイクや自己紹介を通して、だいぶ打ち解けてきた様子だった。

昼食後、本格的なお話づくりがはじまり、気分転換の為、会場を出て、弘前公園などに出かけ、外でお話づくりを行う班なども出てきた。ここで、大人スタッフは徐々にこどもたちの話の輪からは離れ、こどもたちだけでお話を考えるように仕向ける。もちろん、近くで見守り、熱射病や時間配分に気を配り、こどもたちが煮詰まっているようだったら、手助けをするが、「自分たちだけで映画をつくらなければいけないんだ。」という自覚を持ってもらえるように、こどもたちとは適度な距離を置いていた。

お話の内容が決まった班は、早速、カメラやマイクの使い方を習い、撮影の練習を行った。明日の撮影で使う小道具などを準備する係りを決め、1日目は終了。

終了後のスタッフミーティングでは、「こどもたちとの距離の取り方が難しい」「ついつい口を出しすぎてしまうこともあった」など、こどもたちと仲良くなりながらも、こどもたちにもっと主体性を持ってもらわなければならないという課題が挙がった。



(画像1. アイスブレイクの様子)



(画像2. 横浜監督の話聞く子どもたち)

〈2日目〉

昨日の帰りに、各班で話し合った、撮影に必要な小道具や衣装を、家で作ってきたり、準備してきたものを確認して、撮影へと出発。施設での撮影を行った班は、撮影許可の交渉も子どもたちで行った。撮影をしながらも、「ここはもっとこうした方がいい」などの意見が飛び交った。また、子どもたちの中で、監督、カメラマン、音声、役者などの役割が次第に決まり、役割を交替しながら撮影が行われた。昨日のお話づくりの時点では、あまり積極的ではなかった子どもも、カメラマンなどの自分の役割を見つけて、「このシーンはこの位置から撮りたい」などの、とても積極的な発言をするようになった。大人スタッフも、役者に駆り出されたり、子どもたちが全員出演するシーンでは、カメラマンを頼まれたりなど、あくまでも、子どもたちが主役で、大人スタッフは「言えば手伝ってくれる人」という役割が定着してきたように感じられた。

この日のスタッフミーティングでは、撮影がうまくいっていない班が一つあり、最後まで見守り続けるか、少し大人たちでテコ入れをするかについて話し合われた。2日目に撮影した映像は、3日目までに大人スタッフが編集を行う予定だったが、とりあえず編集をしてみて考えようということになった。編集をした映像を見てみると、ドキュメンタリーのようなおもしろさがあった為、このまま子どもたちに任せてみようということになった。



(画像 3. カメラの操作方法を聞く)



(画像 4. 撮影した映像をチェックする)

〈3日目〉

撮影が全て終了していない班は、撮影の続きへと出発。撮影が終わっている班は編集作業へと移った。昨夜のうちに大人スタッフが編集していた映像を見ながら、子どもたちから「ここはこうしたい」などの意見が飛び交い、編集作業が続いた。同時進行で、上映会で使うポスターづくりやチラシづくり、舞台挨拶の練習など、上映会の時間ギリギリまで映画づくりは続いた。上映会場である弘前中央高校講堂へと移動すると、参加者の家族や友達が集まり、子どもたちも少し緊張した面持ちになった。上映前に、各班から舞台挨拶があり、頑張った点や見てほしい点などを伝えた。初めてみる他の班の映画に笑い声起きながらも、上映が終わると、会場からは3日間頑張った子どもたちにたくさんの拍手が送られた。最後には、横浜監督から映画の講評を終え、参加してくれた子どもたち、大人スタッフ全員での記念撮影があり、3日間の「こども映画教室」が終了。



(画像 5. 編集作業の様子)



(画像 6. ポスターづくりの様子)



(画像 7. 舞台挨拶の様子)



(画像 8. 記念撮影)

〈作 品〉

赤チーム：『イタズラレンジャーV』



～あらすじ～

ある大人がむかしのことを思い出していた。ある、せんたいものをやっていた。その名はイタズラレンジャーV！イタズラレンジャーVは、たくさんのイタズラをたくさんしていた。そのイタズラとは……

青チーム：『魔法使いのかくしごと』



～あらすじ～

魔法使いの2人の少女がいました。魔法界のおきさき様と、王様に命令され、人間界へ行った。3年間人間界でくらしていたが、男子の2人に魔法使いだということが、ばれてしまった!?

黄チーム：『みんなのひみつ～林家バージョン～』



～あらすじ～

林家の恥ずかしいひみつを今回特別告白します。林家はどんな方法で克服するのでしょうか。一人二役やった場所もあるので楽しんで見てください。

緑チーム：『悪魔の呪いの謎』



～あらすじ～

家に呪いの手紙がとどいたあいらん。手紙には「呪いの宝石」を悪魔にわたすため、レンガ城に来てくださいと書かれていた。悪魔に宝石をわたした時、あいらんは閉じ込められてしまう。あいらんは脱出できるのか!?

5. 参加者感想（抜粋）

- 私はこの映画づくりをして、みんなと協力をして、映画をつくるという必要性和達成感の2つをあげることができました。(小学5年生・女の子)
- 3日間をふりかえてみると、最初に知らない人たちと仲間になるところからはじめて、同じ時間を過ごして自然に仲良くなって、映画を作るという一つの目標に向かって一生けん命になってました。一つの映画ができるまでに、長い年月がかかっていることも知らなかったし、いろんな役をもつスタッフがいて、完成するまでにいろんな苦労があるんだと知りました。今度は映画をみたりするときに、今までとは違う見方ができるので、楽しみです。(小学5年生・男の子)
- 映画を初めて作ったけど、とり直しなどをたくさんしてすごく大変でした。でも、こんなに大変なことをやっている人たちは、もっと大変だと思いました。またやる時は参加したいです。(小学4年生・女の子)
- ぼくは、この映画教室に参加して、音響の仕事を体験できてうれしかったです。映画を作る時に、チームを作って、意見を出しあっている時や、どうやってさつえいするかや、編集をしている時に、映画づくりはコミュニケーションが大切だなあと感じました。人生に一度できるかできないかの体験ができてとてもうれしかったです。また開催してください。(小学4年生・男の子)
- さいしょはできるかしんばいだったけど、なれてきてからは、とつてもたのしかったです。こんどこういうきかいがあったら、つぎは、みんながもっと笑顔になってくれるような楽しいえいがを作りたいです。(小学3年生・女の子)

6. 学生サポートスタッフ感想（抜粋）

- あらゆる人の価値観を知る、人と協力すること、発想すること、工夫すること……それぞれにあらゆる視点の学びがあったと思います。子どもにとってもスタッフにとっても、とても有意義な時間になったと思います。（大学4年生・女性）
- 子供たちの作品や撮影風景を見ていると独特な視点や表現に驚かされることが多々ありました。美術の教師を目指しているので、将来的に映像作品を授業に取り組めたらと深く思えたので参加して本当に良かったです。（大学4年生・男性）
- 子ども映画教室の3日間は、とても貴重な体験でした。普段子どもとふれ合う機会が少ないため、映像制作を通して、子どもたちの何度もシーンを書き起こす姿、ひとつの場面を納得いくまで撮る姿、自作の衣装や道具を作る姿と、ひたすら頑張り続ける姿がキラキラ眩しくて、私が元気をもらっていました。素敵なことが凝縮された、かけがえのない3日間でした。（大学院修士2年生・女性）
- 生きている。子供からそれが強く感じられる取り組みだったと思います。参加した私達大人が何よりもはっとさせられることが多かったんじゃないでしょうか。そんな映画教室でした。（大学4年生・男性）

Ⅲ. 結び

「こども映画教室@ひろさき2014」はharappaにとっても新しい試みであり、課題も多く残ったが、参加してくれたこどもたち、サポートスタッフに支えられ、新しいharappaの第一歩となる事業になったと思う。毎年「harappa映画館」を開催し、「まちなかで映画館を」「弘前ではなかなか見られない作品を上映したい」という想いで続けているが、来場客数が伸びないことや、若い人たちが観に来てくれないということは、長年の課題であった。そもそも、今の若い人たちは、映画館で映画を観ないのかもしれない。まずは、こどもたちに映画の楽しさを知ってもらいたい。という想いは年々積み、harappaの次なる課題になっていたように思う。そして26年度、「こども映画教室@ひろさき2014」「こども映画館」「こどもアート万博」を開催できたことは、とても大きな実りとなった。

今回「こども映画教室@ひろさき2014」に参加してくれたこどもたちは、必ずしも初めから映画が好きでこの教室に参加してくれたわけではない。もちろん中には、普段から映像を撮っているという参加者もいたが、参加者のほとんどは、夏休みの思い出づくり程度の好奇心だったと思う。しかし、普段とは違う環境の中で、初めて会う友達と、1つの作品を作り上げるという体験は、学校では決して得ることのできない「学び」の経験となったのではないだろうか。「こども映画教室」には、先生も、教科書もないけれど、だからこそ、こどもたち一人ひとりが輝く、学びと成長の場になっていたと感じた。それはこどもたちだけではなく、学生ボランティアを含め、サポートスタッフも同じく、学び、成長できた3日間だった。

また、今回、報告はできなかったが、「こども映画館」では、こどもを対象とした映画としながらも、単なるアニメーションではなく、昔のフィルム映像や、映像の作り方に興味を持ってもらうようなプログラムを考えた。告知の文字情報では少し難しく感じられてしまったかもしれないが、見に来てくれたこどもたちや、親御さんたちは、普段は観る機

会のないジャンルの映画に、とても興味を持ってくれたようである。

「こどもアート万博」では、映画上映後に、建築模型づくりや針金アート、木工工作、アニメーションづくりの4つのワークショップを開催し、たくさんのこどもたちでにぎわった。

こどもたちに楽しんで、アート・文化に親んでもらう為には、もっともっとたくさんの工夫が必要だと思うが、まずはこれらの活動を続けていくことで、たくさんのこどもたちとふれ合い、多様な可能性を広げていけたらと思う。

II. 事 業 報 告

1. 生涯学習教育研究センター主催・共催事業

子どもの育ちを考えるゼミナール			
対象者	子どもに携わる職業（教員・保育者・児童厚生員等）、実践者（子ども会、NPO等）、子どもの育ち・学校外教育に関心のある方		受講者数 延べ 70名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	-
会場	①～⑥ 弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大 4F 生涯学習教育研究センター 多目的室		
日時	講師	所属	実施概要
①平成26年6月11日(水) 18:30～20:30	深作 拓郎	弘前大学生涯学習教育研究センター 講師	<p>「地域」と「遊び」を中心に、学校外での「子どもの育ち」の環境について、受講者が自由に意見を交わしながら学びあうことを目的に開催する。</p> <p>今年度も1冊の本を輪読し、地域社会や現場で起きている事象を捉えながら、自由に議論を交わすことを通して、広い視野と専門的な知識に触れることで、子どもに関わる大人や地域社会の役割についての見識を深めていくことを目標とする。</p>
②平成26年7月9日(水) 18:30～20:30			
③平成26年9月10日(水) 18:30～20:30			
④平成26年10月8日(水) 18:30～20:30			
⑤平成26年11月12日(水) 18:30～20:30			
⑥平成26年12月10日(水) 18:30～20:30			



平成26年度弘前大学公開講座
子どもの育ちを考えるゼミナール

- ・「地域」と「遊び」を中心に、学校外での「子どもの育ち」の環境について、一冊の本を読み、自由に意見を交わしながら学びあうことを目的に開催します。
- ・地域社会や現場で起きている事象を的確に捉え、子どもに関わる大人や地域社会の役割について学びあひましょう。

◆内容

- ・「子どもの育ちを考えるゼミナール」
- 日程：6月～12月の毎月第2水曜日
- 時間：18：30～20：30
- ①平成26年 6月11日(水)
- ②平成26年 7月 9日(水)
- ③平成26年 9月10日(水)
- ④平成26年10月 8日(水)
- ⑤平成26年11月12日(水)
- ⑥平成26年12月10日(水)

◆講師

- ・深作 拓郎
(弘前大学生涯学習教育研究センター 講師)

◆会場

- ・弘前大学創立60周年記念会館
コラボ弘大4階
生涯学習教育センター多目的室

◆申し込み方法

- ・講座名・氏名・住所・電話番号・年齢・性別・職業をご記入のうえ、八万千-FAX-E-mailでお申し込みください。

◆対象

- ・子どもに携わる職業（教員・保育者・児童厚生員等）
- ・実践者（子ども会、NPO等）
- ・子育て支援に関心のある方々
- ・高校生・大学生の参加も大歓迎！

◆申し込み締切

- ・平成26年 6月 6日（金）

◆定員・受講料

- ・15名程度・無料
(テキスト代は、実費負担)

◆申し込み・お問い合わせ先

- ・弘前大学生涯学習教育研究センター
〒036-8561
青森県弘前市文京町3番地
弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大4階
- TEL/FAX：0172-39-3146
- 【受付時間 10:30-16:00（平日）】
- E-mail：sgcenter@gcc.hirosaki-u.ac.jp

◆主催：弘前大学生涯学習教育研究センター

※お寄せ頂いた個人情報の管理には万全を期しております。本センター事業の目的以外に使用することはありません。

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	5	4	1		1
内容	5	4	1		1
資料	6	3	1		1
雰囲気	6	4			1

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男					2	1	1	
女				2	3	1		
無回答		1						

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌							1	
新聞								
DM						1		
テレビ・ラジオ								
知人から				2	2			
インターネット		1			1			
その他					2	1		
無回答								

子どもの育ちを考えるゼミナール

深作 拓郎

（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）

実践を語り合うプチ・ゼミナールから、本の輪読を通して「子どもが育つ社会環境」を考察していくという本格的なゼミナールに移行して2年目を迎えた。今年度も日本子どもを守る会編『子ども白書2014』を指定図書とし、各回レポーターによる発表をベースに議論を深めていった。

今年度キーワードになったのは、「子どもの貧困問題」と「子どもの権利」。いずれも子どもの生育環境を考えていく上で今日的課題である。子どもの貧困問題について報告した長尾恵さんは「弱い立場の人でもどんな立場の人でも人は幸せに生きる権利がある」と述べられていたように、一見当たり前ではあるが今日なかなかしえないこのことへの指摘は、後半の子どもの権利条約からこの問題を掘り下げていく大きなきっかけとなった。

笹郁子さんは、子どもの権利条約の条文と日本国の状況について報告され、基本的事項について共有を図るとともに、子どもの人権と大人の人権の違いを捉えること、すなわち「発達途上にある子どもを理解することが重要である」と指摘されていた。花田俊岳さんは「難民高校生」や「不登校の子ども権利宣言」のレポートから、「子どもにとっての外の世界（＝地域社会）は荒野か楽園かは、関わる大人によって左右されている」と鋭く指摘され、すると同時に、「社会や家庭が不安定な社会であるからこそ、他人事ではなく自分事として問題に携わることの大切さ」を問うていくことが近々の課題であることが議論から共有された。

多種多様な方たちが集い学び合うからこそできる、このゼミにふさわしい議論が毎回繰り広げられた6回であった。次年度は現役大学生への参加も促し、さらに多角的な視点から議論を深めていきたいと考えている。

子どもの育ちを考えるプチゼミナール			
対象者	子どもに携わる職業(教員・保育者・児童厚生員等)、実践者(子ども会、NPO等)、子どもの育ち・学校外教育に関心のある方		受講者数 延べ 75名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	—
会場	①～⑥ 弘前大学八戸サテライト		
日時	講師	所属	実施概要
①平成26年6月12日(木) 18:30～20:30	深作 拓郎	弘前大学生涯学習教育研究センター講師	「地域」と「遊び」を中心に、学校外での「子どもの育ち」の環境について、自由に意見を交わしながら学習することを目的に開催する。地域社会や現場で起きている事象を的確に捉えながら、子どもに関わる大人や地域社会の役割についての視野を広げていくことを目標とする。
②平成26年7月10日(木) 18:30～20:30			
③平成26年9月11日(木) 18:30～20:30			
④平成26年10月9日(木) 18:30～20:30			
⑤平成26年11月27日(木) 18:30～20:30 (平成26年11月13日(木)から変更)			
⑥平成26年12月11日(木) 18:30～20:30			



平成26年度弘前大学公開講座
子どもの育ちを考えるプチゼミナール

・「地域」と「遊び」を中心に、学校外での「子どもの育ち」の環境について、自由に意見を交わしながら学びあうことを目的に開催します。
 ・地域社会や現場で起きている事象を的確に捉え、子どもに関わる大人や地域社会の役割について学びましょう。



◆**内容**

・「子どもの育ちを考えるプチゼミナール」
 日程：6月～12月の毎月第2木曜日
 時間：18:30～20:30

①平成26年 6月12日(木)
 ②平成26年 7月10日(木)
 ③平成26年 9月11日(木)
 ④平成26年 10月9日(木)
 ⑤平成26年 11月13日(木)
 ⑥平成26年 12月11日(木)



◆**講師**

・深作 拓郎
 (弘前大学生涯学習教育研究センター 講師)

◆**会場**

・弘前大学八戸サテライト
 青森県八戸市堀町2-3
 八戸商工会館 1階

◆**対象**

・子どもに携わる職業(教員・保育者・児童厚生員等)・実践者(子ども会、NPO等)
 ・子育て支援に関心のある方々
 ・高校生・大学生の参加も大歓迎!

◆**定員・受講料**

・15名程度・無料

◆**主催**：弘前大学生涯学習教育研究センター

◆**申し込み方法**

・講座名・氏名・住所・電話番号・年齢・性別・職業をご記入のうえ、ハガキ・FAX・E-mailでお申し込みください。

◆**申し込み締切**

・平成26年 6月 6日(金)

◆**申し込み・お問い合わせ先**

・弘前大学生涯学習教育研究センター
 〒036-8561
 青森県弘前市文京町3番地
 弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大4階

TEL/FAX：0172-39-3146
 【受付時間 10:30-16:00(平日)】
 E-mail：sgcenter@cc.hirosaki-u.ac.jp

※お寄せ頂いた個人情報の管理には万全を期しております。本センター事業の目的以外に使用することはありません。

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	10	2			3
内容	11	2			2
資料	9	4			2
雰囲気	13				2

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男				1		1	1	
女	1	2		1	2	3		
無回答					1	2		

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌						3		
新聞				1	1			
DM					1	1	1	
テレビ・ラジオ				1				
知人から		1				2		
インターネット					1			
その他	1							
無回答		1						

子どもの育ちを考えるプチゼミナール

深作 拓郎

（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）

今年度で2年目を迎えたこのゼミは、高校生から妙齢の年齢層の幅が広く、児童館や保育所の職員、地域でNPOや施設ボランティア活動をされている方など非常に多彩な参加者であった。

取り上げられたレポートの中身も「児童館」「放課後子ども教室」「家庭教育支援」「ジュニアリーダー」「フリースクール」と多様ではあったが、「子どもを主体に据える」ということへの問いが通底していたように思う。とりわけ、4回目の附田真帆さんの報告は「子どもの子どもによるこどものための子ども会」の実現に向けて取り組むジュニアリーダーの活動についての内容であったが、「子どもを主体に据える」ということについて鋭い指摘がなされていたのが印象的である。

また、6回目では井ノ上洋一さんがかつてボランティアとして参加していた「フリースクール」について報告されたが、ここでも「子どもを主体に据える」とはどういうことか議論がなされ、「支援」の内実にまで議論が深められたのも印象深い。「受容」に留まらず「巢立ち」までも見据えた「支援」を追及していく必要性が問題提起されていた。それ以上深めることができなかつたのが残念である。今後のテーマとしていきたい。

むつ市連続講演会 「青森県の縄文遺跡からみえてくること～縄文人の生活、そして世界遺産登録へ」				
対象者	一般	受講者数	延べ 78名	
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	むつ市教育委員会	
会場	①、② むつ市立図書館あすなろホール			
日時	講師	所属	演題	実施概要
①平成26年7月5日(土) 14:00～15:45	関根 達人	弘前大学人文学部 教授	「青森県の縄文遺跡と世界遺産登録への道のり」	考古学領域の連続講演会を開催することで、市民の歴史認識を深めるとともに、自ら居住する地域についての理解を深める。
②平成26年7月12日(土) 14:00～15:45	上條 信彦	弘前大学人文学部 准教授	「縄文人の生活と交流」	



①「青森県の縄文遺跡から見えてくること～縄文人の生活、そして世界遺産登録へ」

講師：関根 達人（弘前大学人文学部 教授）

有効回答票数：27票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	15	3	5	1	3
内容	14	5	5		3
資料	11	9	3		4
話し方	17	7	2		1
雰囲気	13	7	3		4

②「縄文人の生活と交流」

講師：上條 信彦（弘前大学人文学部 准教授）

有効回答票数：39票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	14	14	8		3
内容	16	16	4	1	2
資料	10	21	6	1	1
話し方	20	13	4		2
雰囲気	15	19	2	1	2

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男	7		1		1	10	15	
女	16			1	1	5	3	
無回答	1					3	2	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌	9		1			6	6	
新聞								
DM						4	8	
テレビ・ラジオ							2	
知人から	1					4		
インターネット	1				1			
その他	12			1	1	4	4	
無回答	1							

平成26年度弘前大学生涯学習講演会事業評価

菊池友紀

(むつ市教育委員会生涯学習課)

今年度は、「青森県の縄文遺跡からみえてくること～縄文人の生活、そして世界遺産登録へ～」というテーマで2回の講演を行った。

第1回目は人文学部の関根教授から世界遺産登録への現状と課題について講演いただき、遺跡だけでなく周辺的环境なども重要になってくることに多くの受講者が関心を寄せていた。第2回目は同じく人文学部の上條准教授から縄文人の生活と交流について講演いただき、縄文人の知恵や他地域との交流について学ぶことができた。両日とも多くの質問が有り、テーマへの関心の高さがうかがえた。

参加者からは、「とても分かりやすかった」「もっと開催してほしい」という声をいただいている。今後の課題として、参加者のニーズの把握に努め、より多くの方に参加いただけるよう考えていきたい。

中泊町子育て支援講演会「育児中にできる身体を動かすリラクゼーション」			
対象者	育児中の保護者、子育てに関心のある一般市民	受講者数	延べ 28名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	中泊町教育委員会
会場	①小泊子育て支援センター ②中里子育て支援センター		
日時	講師	所属	実施概要
①平成26年9月16日(火) 10:00~11:30	上野 秀人	弘前大学教育学部 准教授	実技を中心に行う、子育て中の保護者を対象とした学習会。育児中にできるリラクゼーションを中心に行う。未就学の子どもを育児中の方々を対象に、育児や身の周りのことについて最新の知見を得ながら相互学習を行うことを目的に、仲間づくりを進める託児付きの育児支援講座を開催する。体験的な学習を通じた育児支援を行うことで、保護者同士のつながりや育児や家庭教育への視野形成を目指す。
②平成26年9月19日(金) 10:00~11:30			

①「育児中にできる身体を動かすリラクゼーション」

会場：小泊子育て支援センター

講師：上野 秀人（弘前大学教育学部 准教授）

【集計なし】

②「育児中にできる身体を動かすリラクゼーション」

会場：中泊子育て支援センター

講師：上野 秀人（弘前大学教育学部 准教授）

有効回答票数：10票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	3	5	2		
内容	4	5			1
資料	4	5			1
話し方	7	2			1
雰囲気	5	4			1

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男					1			
女		3	3	1	1	1		
無回答								

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌								
新聞								
DM								
テレビ・ラジオ								
知人から						1		
インターネット								
その他		3	3	1	2			
無回答								

平成26年度弘前大学公開講座をふりかえって

花 田 佳 悟

(中泊町教育委員会 教育課副参事)

中泊町での公開講座は「子育て支援」をテーマに今年で5年目を迎えました。当講座の開始時間は午前10時ですが、この早い時間に合わせて弘前からお越し下さった教育学部の上野准教授には心から感謝申し上げます。過去4回はいずれも講義形式で実施しておりましたが、今回は実技が中心ということで、期待していました。

9月16日は小泊地域で。また、9月19日は中里地域でそれぞれ「育児中にできる身体を動かすリラクゼーション」という内容で講義及び実技をご指導いただきました。講義も分かりやすく、実技も用具を使ったストレッチでバリエーションが豊富で1時間30分がとても短く感じられました。アンケートでも回答者全員が「とても役に立つ」という回答を寄せ、「講師の話し方が良い」という回答も大半を占めており、講座の雰囲気の良いが際立っていました。受講者の中には出産前の妊婦さんもいて「妊娠中にも応用できる運動を紹介してもらい大変良かった。」と言っていたのが印象的でした。

課題は受講生の少なさです。教育委員会では、周知用のチラシを作り関係者（町内の公立・私立保育所、幼稚園）にPRしていますが、なかなか目を向けてくれません。受講した皆さんからは好評なのですが…これからは教育委員会だけでなく、保育関係者と協力しながら、この講座の楽しさをもっと広めたいと思っています。最後にお忙しい中ご協力いただきました上野秀人准教授とご派遣くださいました弘前大学に改めて敬意を表する次第です。

子育てサークル「ぽぷり」の活動支援「ちびっ子海賊の佐井村探検」				
対象者	育児中の保護者と子ども、子どもや育児に関心のある一般の方々		受講者数	延べ 56名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共催	佐井村教育委員会・佐井村中央公民館
会場	津軽海峡文化館「アルサス」、児童交流センター「ほぼらす」、佐井村仏ヶ浦			
日時	講師	所属	演題	実施概要
平成26年10月11日(土) 10:00～15:00	深作 拓郎 弘前大学 「らぶちる -Love for children-」	弘前大学生涯学習 教育研究センター 講師	「ちびっ子海賊の 佐井村探検」	昨年度行った、「ちびっ子海賊の佐井村まち探検」の第2弾を開催し、子育てサークル「ぽぷり」を中心として、弘前大学「らぶちる」の協力の下、地元高校生ボランティアとともに、村で毎年行われる行事として継続できるように企画・運営をしていきます。



佐井村子育てサークルぽぷりの活動支援・ 「ちびっ子海賊の佐井村まち探検」

藤 井 健

(佐井村教育委員会 生涯学習課 社会教育主事)

昨年度に引き続き、「ちびっ子海賊の佐井村まち探検」を行った。今年は舞台を佐井村の観光名所「仏ヶ浦」に移し、大冒険が繰り広げられた。

今年度も佐井村の子育てサークル「ほぷり」を中心として、弘前大学「らぶちる」の協力で大成功に終わった。

メリット

- 佐井村において「まち探検」というイベントが恒例のものになりつつある。
- 佐井の子供たちにとっての高校生、大学生のお兄さん、お姉さんとの触れ合いの場としての楽しみもある。
- 今年度は、子ども達が海賊になるという設定は同じだが、大海賊を助けるため、仏ヶ浦で薬を探すという設定で、子ども達はとても楽しそうに参加していた。
- ほぷりのメンバーも下見・打ち合わせに積極的に参加し、打ち合わせ会議でしっかりと意見が言えるようになっていた。
- 参加児童32人中、20人近くが昨年のリピーターであるということから、このイベントに対する子供たちの期待度がわかる。

デメリット

- ストーリーが綿密に作られていたため、大海賊役の佐井村保育所長さんの出番が最後の場面のみとなり、一番子供たちと触れ合いたい所長さんにとっては、子供たちとともに活動させてあげられなかったことが、残念であった。
- 活動場所を仏ヶ浦にしたため、天候に左右されることが多く、代替計画をいくつも用意しなくてはいけなくなった。

総合文化祭事業「大学生と語り合おう らぶちる広場」				
対象者	中学生、高校生		受講者数	延べ 200名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共催	—
会場	弘前大学教育学部205教室			
日時	講師	所属	演題	実施概要
平成26年10月25日(土) 10:00～17:00	深作 拓郎 弘前大学 「らぶちる -Love for children-」	弘前大学生涯学習 教育研究センター 講師	「大学生と語り合 おう らぶちる広 場」	中高生を主対象に、日 常のことや学校での生 活、友人関係などについ て、大学生と語り合う、 「サロン形式」の交流会。
平成26年10月26日(日) 10:00～17:00				



総合文化祭事業「大学生と語り合おう らぶちる広場」

深作 拓郎

(弘前大学生涯学習教育研究センター 講師)

今年で3年目を迎える「らぶちるカフェ」。

大学祭に来場する小～高校生が、らぶちるメンバーと自由に語り合えるサロンの空間と機能を提供している。今年度も、教育学部205教室に2日間開設したところ、延べ来場者は200名を超え毎年来る常連メンバーが約半数を占めている。

子どもたちが大学生と語り合う内容は、学校や大人への不満、将来のことなど多岐に渡る。その一部は、ポストイット等を活用して記録しており、それを見直しても、子どもたちが抱える深刻な悩みが垣間見える。こういう子どもたちの常設的な居場所の設置の必要性も感じ取ることができる。

そのほか、今年度の特徴として、鱒ヶ沢町や青森市、遠くは佐井村の子育て支援団体や行政の担当者が情報交換に来場したことも特筆できる。

佐井村事業の直後であることから、準備が遅れてしまうことと、子どもたちの声を次の活動に反映させていくのが大きな課題である。

①「育児や家庭で活かせるアロマ」

講師：原田 光子（青森県総合社会教育センター・家庭教育相談員）

有効回答票数：13票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	12	1			
内容	12		1		
資料	11	1	1		
話し方	12	1			
雰囲気	12	1			

②「子育てと衣生活」

講師：安川あけみ（弘前大学教育学部 教授）

有効回答票数：9票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	5	1	1		2
内容	5	2			2
資料	5	2			2
話し方	6	1			2
雰囲気	6	1			2

③「子どもの慢性疾患：喘息・アレルギー」

講師：田中 完（弘前大学教育学部 教授）

有効回答票数：13票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	4	7	1		1
内容	4	6	2		1
資料	3	6	2		2
話し方	7	4	1		1
雰囲気	7	4	1		1

④「子育てあるあるー子育て井戸腹会議」

講師：青森県家庭教育アドバイザー

有効回答票数：5票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	4	1			
内容	4	1			
資料	2	2	1		
話し方	3	2			
雰囲気	3	2			

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男								
女		5	21	12				2
無回答								

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌		4	4	4				
新聞								
DM			1	5				
テレビ・ラジオ								
知人から						1		
インターネット		1	1					
その他			14	3		1		
無回答			1					

弘前大学連続講座に参加して

尾崎 暁子

(駅前こどもの広場 主任保育士)

- 大学の講座なので、参加者にとっては敷居が高いと思われがちだが、アロマの講座が最初だったので参加しやすかったと思う。
 - 若いお母さん方は講義形式の講座も抵抗なく参加していたように思えた。
 - 講義形式が2回連続したので、1回は親子で参加できるような「親子造形教室」のようなものもあっても良かったように思う。
 - 最後の講座は参加者が少なくなってしまったが、おしゃべりを楽しく出来るとてもいい機会なので、2回連続のおしゃべり会にしても良かったように思う。
 - 普段の子育て講座はどうしてもワークショップ形式なので、参加者が限られていたようで、いつもは参加しない方も参加していたので、とても勉強になった。参加者が少なくても育児について考える時間はとても有意義だと思う。
 - 大学とこどもの広場と両方での申込受付はやはり難しい。
- 託児室も大学生に手伝っていただいたのでとても助かりました。ありがとうございました。また、私自身も参加して色々勉強できたので楽しかったです。ありがとうございました。

三沢市講演会「世界をちょこっとのぞいてみよう」				
対象者	一般市民	受講者数	延べ 44名	
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	三沢市教育委員会	
会場	①～③ 三沢市総合社会福祉センター			
日時	講師	所属	演題	実施概要
①平成26年10月10日(金) 18:30～20:00	足達 薫	弘前大学人文学部 教授	「出産・誕生のイメージに見るルネサンスの都市生活」	国際色豊かな三沢らしいテーマの内容にすることによって楽しく学び、そして学ぶ楽しさを体感する。 また、海外の生活事情を学ぶことから、我々の生活を見つめなおすきっかけとなる。
②平成26年10月17日(金) 18:30～20:00	細矢 浩志	弘前大学人文学部 教授	「EU=未確認政治物体の衝撃～私たちはEUから何を学ぶのか?～」	
③平成26年10月24日(金) 18:30～20:00	面澤 和子	弘前大学教育学部 教授	「子どもの健康と諸外国の学校保健～アメリカ他の国をみてみよう」	



①「出産・誕生のイメージに見るルネサンスの都市生活」

講師：足達 薫（弘前大学人文学部 教授）

有効回答票数：9 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	5	3			1
内容	3	5			1
資料	3	5			1
話し方	4	4			1
雰囲気	4	3			2

②「EU=未確認政治物体の衝撃～私たちはEUから何を学ぶのか?～」

講師：細矢 浩志（弘前大学人文学部 教授）

有効回答票数：8 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	2	2	1	2	1
内容	3	1	1		3
資料	3	3	1		1
話し方	3	2	1		2
雰囲気	3	2			3

③「子どもの健康と諸外国の学校保健～アメリカ他の国をみてみよう」

講師：面澤 和子（弘前大学教育学部 教授）

有効回答票数：7 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度		2	2		3
内容	1	1	4		1
資料	2	1	3		1
話し方		3	2		2
雰囲気		4	1		2

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男			2					
女				1	2	13	3	
無回答						3		

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌			2		2	7		
新聞								
DM								
テレビ・ラジオ								
知人から						5	3	
インターネット								
その他				1		4		
無回答								

平成26年度弘前大学公開講座 「世界をちょこっとのぞいてみよう」

沼 畑 有 乃

（三沢市教育委員会生涯学習課）

今年度も、前回好評だった「世界をちょこっとのぞいてみよう」をテーマに講座を開催した。前回の内容と変化をつけるため、ヨーロッパを中心とした国々についてお話をさせていただいた。

普段なかなか聞く機会のない専門家からのお話を聞くことができ、受講生の方々に満足いただけた。

〈メリット〉

- 様々な国について学ぶことができ、国際色豊かな三沢らしい内容だった。
- 受講者からは、このような内容の勉強が楽しいという声も多く聞かれ、他国について学ぶ貴重な機会となっている。
- 市民の方々に、芸術に興味を持っていただくきっかけとなった。
- 各タイトルなどから、幅広い年齢層の方々に興味を持っていただくことができた。
- 一般市民向けであることから、毎年楽しみにされ熱心に参加される方々がいる。
- 今年度は、受講料が無料であることから、気軽に参加していただくことができ、大変好評だった。

〈デメリット〉

- 昨年に比べると受講者が増加したが、一般向けの講座であることから、人が集まりにくい。
- 今回の講座の素晴らしさとはまったく関係のない意見だが、参加者からの意見の一つとして、どこの講座でも最後に必ずアンケートを記入する流れだが、それがおっくうだという忌憚のない意見もあったため、一般の方や高齢者の方が参加される講座では、今後なんらかの工夫をしていきたい。

高校生のための学習講座「大学で『学ぶことのおもしろさ』を体験しよう」

対象者	高校生	受講者数	延べ 11名	
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	NPO法人 R.ぷらっと	
会場	①～⑦ 弘前大学総合教育棟 3F 309教室			
日時	講師	所属	演題	実施概要
①平成26年5月30日(金) 【※受講生不在のため中止】	中澤 侃志	NPO法人 R.ぷらっと 理事	「『学ぶことのおもしろさ』をともに体験しよう」	「アメリカは日本をどのようにみているのか」、「宇宙の謎に迫る」等のテーマで、自然科学や社会科学に関する研究成果をふまえた講義を行う。
②平成26年6月6日(金) 【※受講生不在のため中止】	藤田 昇治	弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授	「自分の可能性を信じ挑戦し続けよう—教育と学習のとらえ方—」	
③平成26年6月13日(金) 【※受講生不在のため中止】	ビクター・リー・カーペンター	弘前大学人文学部 教授	「アメリカは日本をどのようにみているのか」	
④平成26年6月20日(金) 【※受講生不在のため中止】	赤池あらた	弘前大学保健学研究科 助教	「福祉・介護の課題を考える」	
⑤平成26年6月27日(金) 17:30～19:00	葛西 真寿	弘前大学理工学研究科 教授	「宇宙の謎に迫る」	
⑥平成26年7月4日(金) 17:30～19:00	小磯 重隆	弘前大学学生就職支援センター 准教授	「職業・進路を選択するときの大事にしたいこと」	
⑦平成26年7月11日(金) 17:30～19:00	藤田 昇治	弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授	「日本社会はどうか—直面している様々な課題を考える—」	



【大学で『学ぶことのおもしろさ』を体験しよう】

「受験」にシフトしがちな高校での勉強ですが、「大学で学ぶ」経験をすることで、「学ぶおもしろさ」を体験してみませんか？

◆日程（平成26年 5月30日～7月11日、毎日17:30～19:00）

- ① 5月30日（金）「『学ぶことのおもしろさ』をともに体験しよう」
担当：中澤 俊志（NPO法人「R.ぶらっと」理事）
- ② 6月 6日（金）「自分の可能性を信じ挑戦し続けようー教育と学習のとらえ方ー」
担当：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）
- ③ 6月13日（金）「アメリカは日本をどのようにみているのか」
担当：ピクター・リー・カーペンター（弘前大学人文学部教授）
- ④ 6月20日（金）「福祉・介護の課題を考える」
担当：赤池 あらた（弘前大学大学院保健学研究科助教）
- ⑤ 6月27日（金）「宇宙の隣に居る」
担当：藤西 尊寿（弘前大学理工学研究科教授）
- ⑥ 7月 4日（金）「職歴・進路を選択するときに大事にしたいこと」
担当：小堀 馨寿（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）
- ⑦ 7月11日（金）「日本社会はどのようなかー直面している様々な課題を考えるー」
担当：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）



◆会場

・弘前大学総合教育棟309教室
（弘前市文京町）番地

◆対象・定員・受講料

・高校生・30名・無料

◆申込み締切

・平成26年 5月26日（月）

◆申込み方法

・顔康名・氏名・住所・電話番号・学年・性別を二重入の
うえ、ハ付半・FAX・E-mailでお申し込みください。

◆申込み・お問い合わせ先

・弘前大学生涯学習教育研究センター
〒036-8561
青森県弘前市文京町3番地
弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大44棟
TEL/FAX: 0172-39-3766
【受付時間 10:30-16:00(平日)】
E-mail: sgcenter@cc.hirosaki-u.ac.jp

◆主催 弘前大学生涯学習教育研究センター/ NPO法人「R.ぶらっと」

※お寄せ頂いた個人情報の管理には万全を期しております。本センター運営の目的以外に使用することはありません。

①【『学ぶことのおもしろさ』をともに体験しよう】

講師：中澤 俊志（NPO法人「R.ぶらっと」理事）

【※受講生不在のため中止】

②「自分の可能性を信じ挑戦し続けようー教育と学習のとらえ方ー」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

【※受講生不在のため中止】

③「アメリカは日本をどのようにみているのか」

講師：ピクター・リー・カーペンター（弘前大学人文学部 教授）

【※受講生不在のため中止】

④「福祉・介護の課題を考える」

講師：赤池 あらた（弘前大学大学院保健学研究科 助教）

【※受講生不在のため中止】

⑤「宇宙の謎に迫る」

講師：葛西 真寿（弘前大学大学院理工学研究科 教授）

有効回答票数：6 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
内 容	6				

⑥「職業・進路を選択するときに大事にしたいこと」

講師：小磯 重隆（弘前大学学生就職支援センター 准教授）

有効回答票数：2 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
内 容	2				

⑦「日本社会はどうなるのか—直面している様々な課題を考える—」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：3 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
内 容	3				

受講のきっかけ

インターネット	先生から	チラシ	友人・親から	その他	無回答
	3	6	2		

高校生のための学習講座

「大学で『学ぶことのおもしろさ』を体験しよう」を終えて

藤 田 昇 治

（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

高校生に「学ぶことのおもしろさを体験してもらおう」というコンセプトで、「宇宙の謎に迫る」、「職業・進路を選択するときに大事にしたいこと」、「日本社会はどうなるのか」等のテーマで、全部で7回の講座を実施した。参加者の感想は概ね良好ではあったが、全体的に受講者数は少なく、4回の講座については中止となった、昨年度に引き続き実施した事業ではあったが、高校の先生方との連携を強める必要がある、という課題が明らかになった。

七戸町講演会「住民の生活を支える活動を目指して」				
対象者	民生委員・福祉によるまちづくりに関心のある方、他		受講者数	延べ 90名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共催	七戸町教育委員会
会場	①、② 七戸町柏葉館			
日時	講師	所属	演題	実施概要
①平成26年7月8日(火) 13:30～15:30	藤田 昇治	弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授	「住民の生活を支える活動を目指して」	民生委員や福祉関係者を主たる対象とした研修を行い、今日の医療・福祉領域における課題・福祉によるまちづくりについて理解を深める。
②平成27年2月10日(火) 13:30～15:30			「協働による福祉のまちづくり」	



①「住民の生活を支える活動を目指して」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：42票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	8	12	13	0	9
内容	10	10	15	1	6
資料	2	7	19	1	13
話し方	7	4	20	5	6
雰囲気	5	7	19	0	11

②「協働による福祉のまちづくり」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：31票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	10	12	3		6
内容	12	14	3		2
資料	6	12	6		7
話し方	10	12	7		2
雰囲気	7	12	7		5

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男					1	2	4	
女			1		12	29	9	
無回答					3	9	3	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌			1		1	8	2	
新聞						1		
DM					1			
テレビ・ラジオ								
知人から					1	4	1	
インターネット								
その他					10	25	12	
無回答					3	2	1	

平成26年度 七戸町講演会「住民の生活を支える活動を目指して」

大沢田 慎 一

(七戸町教育委員会生涯学習課 社会教育係)

1、目的

「少子高齢化」が進行する中で、高齢者の介護や「寝たきり」予防、防災などの取り組みを進める中で、民生委員や町内会・行政・地域住民に必要とされていることについて理解を深める学習機会を提供することを目的とする。

2、成果

現在、地域の中で生じている様々な問題をどのように把握するか、さらに地域の再生をどのように図るのか。労働・生産・生活の様々な場面で生じている課題と向き合うことが必要とされている中で、医療、福祉、健康、保健、防災、自治会、行政関係者が一堂に会することで連携して取り組む必要性について考えるきっかけになった。

3、課題

医療、福祉、健康、保健、防災、自治会、行政関係者が聴講する中で、講義的な情報提供、事例紹介が多かったように感じた。

開催日が平日の日中ということで、聴講者は何らかの問題意識をもっていると思われることから、ポイントポイントで会場インタビューから課題を拾い、その解決方法をともに考えるようなものであれば、より理解度が深まるのではないかと感じた。

五戸町講演会「胃がんについて」				
対象者	一般市民、医療関係者	受講者数	延べ 49名	
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	五戸町教育委員会	
会場	五戸町立公民館 小ホール			
日時	講師	所属	演題	実施概要
平成26年9月30日(火) 13:30～15:00	福田 眞作	弘前大学医学研究科 教授	「胃がんについて」	地域住民を対象として、胃がんについて理解を深めてもらう。

「胃がんについて」

講師：福田 眞作（弘前大学医学研究科 教授）

有効回答票数：35票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	17	10	2		6
内容	22	11			2
資料	18	11	1		5
話し方	22	8	1		4
雰囲気	18	10			7

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男						1	2	
女					1	7	17	
無回答						2	5	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌 新聞 DM					1	2	9	
テレビ・ラジオ 知人から						4	4	
インターネット その他						4	9	
無回答							2	

平成26年度 弘前大学講演会 五戸町 報告

石ヶ森 謹 夫
(五戸町教育委員会教育課 社会教育主事)

〈内 容〉

胃がんについて、ピロリ菌の家族への感染、検診受診の大切さ等についてお話ししていただいた。受講者も、講師と意見の交換等をしながら理解を深めていた。

- 当日の受講生の年齢や性別にあわせてお話しをしていただいた。
- 受講生が理解しやすいように身近な話題を織り交ぜ、時折、受講生に質問をしてもらったりしながらお話ししていただいた。
- 講師料も旅費も負担せず大学の最新の専門的なお話しを聞くことができ、とてもありがたい事業だと感じています。高齢者だけでなく、もっと多くの参加者がある場でやってもらうようにしたいと感じた。

つがる市連続講演会「地域課題・生活課題に取り組む人材育成講座」				
対象者	一般	受講者数	延べ 37名	
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	つがる市教育委員会	
会場	①～③ つがる市生涯学習交流センター「松の館」			
日時	講師	所属	演題	実施概要
①平成26年10月4日(土) 13:00～15:00	日景 弥生	弘前大学教育学部 教授	「あなたのワーク・ ライフ・バランス は大丈夫？」	地域における様々な 課題について、「ワー ク・ライフ・バランス」 や「介護」をキーワ ードとして理解を深める とともに、課題克服の ためにはどのようにし たらよいか、という ことを実践的に考え る。
②平成26年10月11日(土) 13:00～15:00	赤池あらた	弘前大学保健学科 助教	「自分と相手の身 体を守る介護技術 と介護予防」	
③平成26年10月18日(土) 13:00～15:00	藤田 昇治	弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	「絆を強めともに 地域課題・生活課 題に取り組もう」	



①「あなたのワーク・ライフ・バランスは大丈夫？」

講師：日景 弥生（弘前大学教育学部 教授）

有効回答票数：11票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	3	3	1		4
内容	5	3	1		2
資料	4	4			3
話し方	5	3	1		2
雰囲気	5	2	2		2

②「自分と相手の身体を守る介護技術と介護予防」

講師：赤池あらた（弘前大学保健学研究科 助教）

有効回答票数：13票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	7	5	1		
内容	6	6			1
資料	3	5			5
話し方	6	5	1		1
雰囲気	6	5	1		1

③「絆を強めともに地域課題・生活課題に取り組もう」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：11票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	3	6			2
内容	5	6			
資料	5	4	1		1
話し方	5	5			1
雰囲気	5	5			1

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男						3	6	
女					12	7	1	
無回答						3	3	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌					9	3	5	
新聞								
DM					3	2	2	
テレビ・ラジオ								
知人から						2	1	
インターネット								
その他						5	2	
無回答						1		

つがる市連続講演会

「地域課題・生活課題に取り組む人材育成講座」を終えて

藤田 昇治

（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

これまでの一般住民を対象とした「公開講座」から、「地域課題・生活課題住に取り組む人材育成」というコンセプトのものに切り替え、「男女共同参画」や「介護・福祉」、「地域づくり」を中心テーマとして、3回の講座とした。受講者は、これまでの「公開講座」のリピーターも多かったが、新たに受講者の開拓も確実に実現した。受講者へのアンケートでは、「とても参考になった」と「それなりに参考になった」という回答が多く、概ね好評であった。

企業・行政・NPO法人で働く人のための学習講座 「これで自分のパワーアップをめざそう」				
対象者	企業・行政・NPO法人で働く人		受講者数	延べ 33名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共催	NPO法人 R.ぶらっと
会場	①～④ 弘前大学創立50周年記念会館			
日時	講師	所属	演題	実施概要
①平成26年11月7日(金) 18:30～20:00	中澤 侃志	NPO法人 R.ぶらっと 理事	「仲間と信頼関係 を作るということ」	企業・行政・NPO法人で働く人を対象として、自己と向き合うことからはじめ、自尊感情を高め、職場での充実感を高揚させる、自己研修の機会とする。
②平成26年11月14日(金) 18:30～20:00	藤崎 浩幸	弘前大学 農学生命科学部 准教授	「グリーンツーリズムで地域の活性化を図る」	
③平成26年11月21日(金) 18:30～20:00	児玉 安正	弘前大学理工学部 教授	「地球温暖化と異常気象」	
④平成26年11月28日(金) 18:30～20:00	藤田 昇治	弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	「より充実した生活のための社会参加のすすめ」	



生涯学習講座
企業・行政・NPO法人で働く人のための学習講座
「これで自分のパワーアップをめざそう」

●目的
企業・行政・NPO法人で働く人を対象として、自己と向き合うことからはじめ、自尊感情を高め、職場での充実感を高揚させる、自己研修の機会とする。

●日程
①平成26年11月7日(金) 18時30分～20時
題名:「仲間と信頼関係を作るということ」
講師: 中澤 侃志 (NPO法人「R.ぶらっと」理事)

②平成26年11月14日(金) 18時30分～20時
題名:「グリーンツーリズムで地域の活性化を図る」
講師: 藤崎 浩幸 (弘前大学農学生命科学部准教授)

③平成26年11月21日(金) 18時30分～20時
題名:「地球温暖化と異常気象」
講師: 児玉 安正 (弘前大学理工学部教授)

④平成26年11月28日(金) 18時30分～20時
題名:「より充実した生活のための社会参加のすすめ」
講師: 藤田 昇治 (弘前大学生涯学習教育研究センター准教授)

●対象 企業・行政・NPO法人で働く人 ●定員 33名

●会場 弘前大学創立50周年記念会館

●主催 弘前大学生涯学習教育研究センター・NPO法人「R.ぶらっと」

●申込 10月31日(金) 申込・住所・電話番号・年齢・性別・職種をご記入の上、履歴・FAX・E-Mailにてお申し込みください。

申込先・問合せ
〒030-0191 弘前県弘前市文政町1番地 弘前大学創立50周年記念会館501号室 生涯学習教育研究センター
TEL:0182-527-2221 FAX:0182-527-2222 E-MAIL: info@lifelonglearning.jp
E-MAIL: seminar@lifelonglearning.jp
HP: http://lifelonglearning.jp/department/

①「仲間と信頼関係を作るということ」

講師：中澤 侃志 (NPO法人「R.ぶらっと」理事)

有効回答票数：9票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	4	5			
内容	4	5			
資料	5	4			
話し方	6	3			
雰囲気	5	4			

②「グリーンツーリズムで地域の活性化を図る」

講師：藤崎 浩幸（弘前大学農学生命科学部 准教授）

有効回答票数：9 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	4	5			
内容	4	5			
資料	5	4			
話し方	6	3			
雰囲気	5	4			

③「地球温暖化と異常気象」

講師：児玉 安正（弘前大学理工学部 教授）

有効回答票数：7 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	1	1	3	1	1
内容	1	2	2	1	1
資料			4	1	2
話し方	1	1	3	1	1
雰囲気	2	1	3		1

④「より充実した生活のための社会参加のすすめ」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：7 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度		4	2		1
内容		3	3		1
資料		2	4		1
話し方	1	4	1		1
雰囲気	2	2	1		2

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男		2	3	4	3	6	2	
女		4	2		3			
無回答		1						2

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌		3			3		1	
新聞				4				
DM			2			5	1	
テレビ・ラジオ								
知人から		1						
インターネット						2		
その他		3	3		1			
無回答					2	1		

企業・行政・NPO法人で働く人のための学習講座 「これで自分のパワーアップをめざそう」を終えて

藤田 昇治

（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

企業・行政・NPO等で働く人を対象として、「仲間との信頼関係を作ること」、「グリーンツーリズムで地域の活性化を図る」、「地球温暖化と異常気象」、「より充実した生活のための社会参加のすすめ」というテーマの、4回の講座として実施した。参加者の感想では概ね好評で、昨年度と比較すると、参加者数の増加があり、また、企業や行政の人の参加が増え「幅が広がった」と言えるのだが、今後企業などへ一層の働きかけが必要とされている。

弘前市公民館関係職員研修会			
対象者	公民館職員、生涯学習担当職員、 社会教育委員	受講者数	延べ 84名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	弘前市教育委員会
会場	①弘前大学創立60周年記念会館「コラボ弘大」2階 セミナー室 ②東目屋公民館 ③和徳公民館		
日時	講師	所属	実施概要
①平成26年7月18日(金) 13:30～16:00	藤田 公仁子 藤田 昇治	富山大学地域連携 推進機構生涯学習 部門教授 弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	今日、健康問題や教育問題、地域活性化、住民の「絆づくり」など、様々な課題が生じています。こうした中で、市内地区公民館や全国の公民館の活動の実践例などをもとに、社会教育・生涯学習の担当職員として必要とされる専門的知識・技能の習得を目指します。
②平成26年10月23日(木) 14:00～16:00	福澤 牧子 藤田 昇治	東目屋公民館 少年教育指導員 弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	
③平成26年12月18日(木) 14:00～16:00	藤田 史枝 藤田 昇治	和徳公民館 少年教育指導員 弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	



①弘前市公民館関係職員研修会

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）
 講師：藤田公仁子（富山大学地域連携推進機構生涯学習部門 教授）

有効回答票数：11票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
前半	4	7			
後半ワークショップ	9	1			1

②弘前市公民館関係職員研修会

事例発表：福澤 牧子（東目屋公民館 少年教育指導員）
 講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：21票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
前半	12	9			
後半ワークショップ	15	5			1

③弘前市公民館関係職員研修会

事例発表：藤田 史枝（和徳公民館 少年教育指導員）
 講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：23票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
前半	18	5			
後半ワークショップ	14	9			

参加した動機・理由（複数回答可）

	第1回	第2回	第3回
公民館の仕事について基本的なことから学びたかったから	4	11	11
ワークショップに関心を持ったから	4	4	5
上司に参加するようすすめられたから	2	4	4
友人・知人からすすめられたから			
日常業務の参考にしたかったから	7	11	14
研修に参加することは、当然だと思っていたから	1	6	5
前にも研修会に参加して参考になったから	3	6	8
その他：他の公民館の事業に興味があったから、開催場所だったから		3	

平成26年度 公民館関係職員研修会を共催して

三 上 淳
 （弘前市教育委員会 生涯学習課）

地域住民の多様な学習要求に応え、地域づくりを推進する上で必要とされる公民館関係職員・社会教育委員などの専門的知識・技能の習得を目指し、公民館で実施している事業への新たな住民の参加を図り、「住民同士の結びつき」および「住民と公民館・社会教育施設等との結びつき」を強めるうえで、今何が必要とされているか、地区公民館の事業発表を基に実践的に考えてきました。

3回に渡っての研修会の中では、弘前大学生涯学習教育研究センター准教授藤田昇治氏が講師となり、またコーディネーターとなってワークショップを実施し、公民館活動や運営に対する適切なご指導とご意見を頂き、研修参加者からは、事業実施の参考となり大変有意義な研修であると評価されております。

総合文化祭事業「トークと歌でたどる昭和戦後史(その2)」			
対象者	一般	受講者数	延べ 15名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	—
会場	弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大4階 生涯学習教育研究センター多目的室		
日時	講師	所属	実施概要
平成26年 10月26日(日) 10:00～12:00	藤田 昇治	弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授	日本の戦後のあゆみを、政治・経済・社会・文化などの領域における出来事を中心として振り返るとともに、時代を象徴した歌・思い出の歌・青春を刻んだ歌をみんなで見学します。



参加 無料

平成26年度 弘前大学総合文化祭
生涯学習教育研究センターイベント

トークと歌でたどる 昭和戦後史 (その2)

日本の戦後のあゆみを、政治・経済・社会・文化などの領域における出来事を中心として振り返るとともに、時代を象徴した歌・思い出の歌・青春を刻んだ歌をみんなで見学します。

- 開催日：平成26年10月26日(日)
- 時 間：10:00～12:00
- 場 所：弘前大学生涯学習教育研究センター 多目的室
(弘前大学創立60周年記念会館「コラボ弘大」4階)
- 対象者・定員：一般・20名
- 申込み締め切り：平成26年10月22日(木)

■ 申込み方法：講座名・氏名・住所・電話番号・年齢・性別・ご所属をご記入のうえ、はがき・FAX・E-mail・お電話でお申込みください。なお、当日の飛び入り参加も大歓迎です。

※ご参加の皆様には、「登録」をお願いいたします。
この「登録」は登録料に課税していません。

〒036-8561 弘前市文政町3番地
弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大4階
弘前大学生涯学習教育研究センター
TEL/FAX 0172-38-3146(日) 10:30-16:00

◆主催 弘前大学生涯学習教育研究センター

※お申し込みいただいた個人情報は厳密に管理させていただきます。
本学の网站以外に使用することはありません。

総合文化祭事業「トークと歌でたどる昭和戦後史(その2)」

講師：藤田 昇治(弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授)

有効回答票数：14票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	7	7			
内容	4	8	1		1
話し方	9		3	1	1
雰囲気	8		5		1

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男					1	2	1	
女				1	3	1	5	
無回答								

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌					1		1	
新聞								
DM				1	3	1	2	
テレビ・ラジオ								
知人から						1		
インターネット						1		
その他							1	
無回答							2	

総合文化祭

「トークと歌でたどる戦後昭和史（その2）」を終えて

藤 田 昇 治

(弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授)

急激に経済発展するとともに社会変容を遂げた「高度成長」の時代状況を振り返るとともに、当時多くの人々に歌われていた曲を歌うことで、青春時代・少年少女時代を懐かしむ、そして気軽に「総合文化祭」に足を運んでもらう事業として実施した。参加者は15人と、前年度と比較してやや少なかったが、トークの内容については「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」という回答の合計が100パーセントになっており、また、雰囲気について「楽しい」という回答が50パーセントとなっており、概ね参加者にとって気軽にできる「社会参加」としての意義を持つものであった。

「トークと歌で迎えよう、クリスマスとお正月!!」			
対象者	一般・学生・高校生	受講者数	延べ 28名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	-
会場	弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大 4階 生涯学習教育研究センター多目的室		
日時	講師	所属	実施概要
平成26年12月20日(土) 13:30～15:00	藤田 昇治	弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授	クリスマスと正月にちなんだトークを まじえながら、クリスマス・正月・冬の 季節にちなんだ曲をみんなで歌い、参加者 同士の交流を図る。



参加無料 平成26年度・弘前大学生涯学習教育研究センターイベント HIRASAKI UNIVERSITY

トークと歌で迎えよう、
クリスマスとお正月!!

クリスマスと正月にちなんだトークをまじえながら、クリスマス・正月・冬の季節にちなんだ曲をみんなで歌い、参加者同士の交流を図りましょう。

■日 時 2014年12月20日(土) 13時30分～15時
 ■会 場 弘前大学生涯学習教育研究センター多目的室
 ■定 員 20名
 ■参 加 費 無料
 ■対 象 一般・学生・高校生
 ■申 込 先 弘前大学生涯学習教育研究センター
 ■申込締切 12月15日(月)
 ■申込方法 電話・Eメール・FAX・Eメール・お電話で
 ご応募ください。お申し込みは、お電話でも大丈夫です。

※この「募集」を印刷していただき、この「募集」を郵送していただきます。

【お問い合わせ先】
 1 事務局
 2 事務局
 3 事務局
 4 事務局
 5 事務局
 6 事務局
 7 事務局
 8 事務局
 9 事務局
 10 事務局
 11 事務局
 12 事務局
 13 事務局
 14 事務局
 15 事務局

〒030-8565 弘前市文京町3番地
 弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大 4階
 弘前大学生涯学習教育研究センター
 TEL/FAX: 0172-59-3146(平日:10:30～16:00)

◆主催 弘前大学生涯学習教育研究センター
 ※お申し込みの個人情報は厳重に保守させていただきます。
 本学のWebサイトに掲載することはありません。

「トークと歌で迎えよう、クリスマスとお正月!!」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：27票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	17	5	2		3
内容	14	6	1		6
話し方	15	2	4	3	3
雰囲気	20		4		3

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男					2	1	2	
女					4	6	7	
無回答					1	2	2	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌					1	1	1	
新聞								
DM					6	6	2	
テレビ・ラジオ								
知人から						1	7	
インターネット								
その他						1	1	
無回答								

「トークと歌で迎えよう、クリスマスとお正月」を終えて

藤 田 昇 治

(弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授)

クリスマスとお正月、そして冬という季節にちなんだ曲を参加者同士一緒に歌おう、というイベントとして開催された。参加者は28人で、「総合文化祭」に参加した人（リピーター）も多かった。アンケートでは、約53パーセントが「ダイレクトメール」でこの講座を知ったと回答している。また、「知人から」と回答した人が約30パーセントいて、参加者が他の参加者を呼び込む面も見られる。初めての試みであるハンドベルの演奏には、自発的な参加が多かった。全体として「楽しい」雰囲気だったとする人が、約74パーセントであった。

「トークと歌で迎えよう春、別れと出会いの季節!!」			
対象者	一般・学生・高校生	受講者数	延べ 25名
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	-
会場	弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大4階 生涯学習教育研究センター多目的室		
日時	講師	所属	実施概要
平成27年 3月 7日(土) 13:30～15:00	藤田 昇治	弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	春という季節にちなんだトークをまじえながら、春・別れ・出会い・新学期にちなんだ曲をみんなで歌い、参加者同士の交流を図りましょう。



「トークと歌で迎えよう春、別れと出会いの季節!!」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：25票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	17	3		1	4
内容	11	8		1	5
話し方	16	2	2	1	4
雰囲気	17		2		6

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男					1	2	4	
女					3	3	9	
無回答					1	1	1	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌							1	
新聞							1	
DM					5	4	4	
テレビ・ラジオ							2	
知人から						1	3	
インターネット								
その他						1	2	
無回答							1	

「トークと歌で迎えよう春、別れと出会いの季節!!」を終えて

藤 田 昇 治

(弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授)

12月のイベントに引き続き、気軽にできる「社会参加」を目指した事業として行われた。参加者は25人で、約52パーセントが「ダイレクトメール」でこの講座を知ったと回答している。アンケートでは、参加の動機として「音楽が好きだから」とか「歌うのが楽しいので」という回答が多かったが、中には「一人暮らしになり、人々と歌ったり語り合うために参加した」という人もいて、気軽にできる「社会参加」の機会になっていることを確認できた。講座の雰囲気については、「無回答」を除くと89パーセントの人が「楽しい」と回答している。

鶴田町講演会「健康な生活をめざして」				
対象者	一般市民	受講者数	延べ 15名	
主催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共催	鶴田町教育委員会	
会場	鶴田町公民館			
日時	講師	所属	演題	実施概要
平成27年2月21日(土) 13:00～16:30	戸塚 学	弘前大学教育学部 学部長・教授	「健康保持のため 手軽にできる運動 に挑戦しよう」	生活習慣病の予防や 健康保持・増進という 視点から手軽にできる 運動を実際に体験する とともに、今後一段と 進む地球温暖化が地域 農業に与える影響・可 能性について学ぶ講座 とする。
	伊藤 大雄	弘前大学農学生命 科学部附属生物共生 教育研究センター 准教授	「地球温暖化と青 森県農業」	

「健康な生活をめざして」

①「健康保持のため手軽にできる運動に挑戦しよう」

講師：戸塚 学（弘前大学教育学部 学部長・教授）

②「地球温暖化と青森県農業」

講師：伊藤 大雄（弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 准教授）

有効回答票数：10票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	3	4	1		2
内容	5	3			2
資料	6	3			1
話し方	4	5		1	
雰囲気	5	4			1

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男					1		2	
女				1	1	1	2	
無回答						1	1	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌				1	1	2	3	
新聞								
DM								
テレビ・ラジオ					1			
知人から								
インターネット								
その他							1	
無回答							1	

鶴田町講演会「健康な生活をめざして」を終えて

藤 田 昇 治

(弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授)

平成27年2月21日、鶴田町の中央公民館を会場として、講演会「健康な生活をめざして」が開催された。今回は、教育学部の戸塚学先生と農学生命科学部の伊藤大雄先生を講師として、それぞれ「健康保持のため手軽にできる運動に挑戦しよう!」と「地球温暖化と青森県農業」というテーマで講演していただいた。受講者は15人と、例年と比較してやや少なかったものの、アンケートでは概ね好評であった。自由記述には、「本講座には継続して参加しており、今回の2つのテーマにも興味があったので参加しました」というリピーターの声もあり、こうした受講者の期待に応える事業の展開が求められている。

2. 学部・大学院の主催事業など

【人文学部】

名称・開催日	講師	内 容	
中間報告会「課題解決型学習と主体的な学び —大学生のチャレンジ2014—」		文部科学省GP「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の採択を受け、社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材育成の取組みを行ってきました。本事業において弘前大学は、「地域企業と実践する課題解決型学習による主体的な学び」を取組テーマとして掲げ、人文学部と農学生命科学部を中心に課題解決型学習（PBL）に積極的に取り組んでいます。今回は、学生が主体的に学んできた課題解決型学習の中間報告会を行います。	
平成26年7月18日(金)	なし		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会場】 コラボ弘大8階八甲田ホール 【対象】 一般市民 【定員】 120人 【参加費】 無料		125人	弘前大学人文学部

名称・開催日	講師	内 容	
二国間交流事業共同セミナー 「地域人材流出問題と地域発展政策」		本フォーラムは、「人口減少時代における持続可能な地域づくり」をテーマとし、諸外国における具体的先行事例を学び、有効な地域づくり政策を模索することを目的としています。	
平成26年10月17日(金)	慶北大学校経済通商学部 教授 オムチャンオク 啓明大学校経済金融学科 教授 キムヨンチョル ほか		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会場】 弘前市民文化交流館 【対象】 一般市民 【定員】 120人 【参加費】 無料		110人	弘前大学地域未来創生センター

名 称・開催日	講 師	内 容	
特別展「東北の弥生化―縄文時代が変わるとき―」		弘前大学北日本考古学研究センターが保有している貴重な遺物を一般公開いたします。	
平成26年10月18日(土) ～平成26年11月24日(月)	なし		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学北日本考古学研究センター展示室 【対 象】 一般市民 【定 員】 なし 【参加費】 無料		810人	弘前大学北日本考古学研究センター

名 称・開催日	講 師	内 容	
弘前大学フォーラム 「課題解決型学習と主体的な学びⅢ ―大学生のチャレンジ2014―」		文部科学省GP「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の採択を受け、社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材育成の取組みを行ってきました。本事業において弘前大学は、「地域企業と実践する課題解決型学習による主体的な学び」を取組テーマとして掲げ、人文学部と農学生命科学部を中心に課題解決型学習（PBL）に積極的に取り組んでいます。今回は、1年間学生が主体的に学んできた課題解決型学習の成果報告会を行います。	
平成26年12月19日(金)	なし		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 ホテルナクアシティ弘前 【対 象】 一般市民 【定 員】 120人 【参加費】 無料		118人	弘前大学人文学部

【医学研究科】

名 称・開催日	講 師	内 容	
ロコモティブシンドローム		ロコモティブシンドロームを正しく理解していただくための一般向けの公開講座です。専門の医師が、「ロコモティブシンドロームって何?」「ロコモと脊椎疾患(せぼねのびょうき)」「膝の痛みがロコモを引き起こす」についてわかりやすく解説します。	
平成26年 9月 5日(金) 18:00~20:00	弘前大学医学研究科 整形外科科学講座 教授 石橋 恭之 弘前大学医学研究科 整形外科科学講座 助教 田中 利弘 つがる総合病院 整形外科 医長 佐々木英嗣		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部コミュニケーションセンター 【対 象】 一般市民 【定 員】 100名 【参加費】 無料		67人	【主催】 弘前大学医学研究科広報委員会 【共催】 公益社団法人青森医学振興会

名 称・開催日	講 師	内 容	
顔の医学・皮膚の医学		顔の医学・皮膚の医学を正しく理解していただくための一般向けの公開講座です。専門の医師が、「帯状疱疹」「最近の形成外科治療」についてわかりやすく解説します。	
平成26年 10月18日(土) 14:00~16:00	国立病院機構弘前病院 皮膚科 医師 熊野 高行 弘前大学医学研究科 形成外科学講座 教授 漆館 聡志		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前プリンスホテル 【対 象】 一般市民 【定 員】 制限なし 【参加費】 無料		54人	【主催】 弘前大学医学研究科広報委員会 【共催】 国立病院機構弘前病院・公益社団法人青森医学振興会

【理工学研究科】

名 称・開催日	講 師	内 容	
「地質の日」 in 弘前2014		5月10日の「地質の日」にちなみ、地質学に関する催しを行い、市民の方が地球について考えるきっかけとして頂くことを目的とする。午前は、小・中学生を対象に恐竜のペーパークラフト作成を行い、午後は一般の方（概ね高校生以上）を対象に、広い意味で地質に関連する「場所によって異なる地震のゆれ」、「南極の氷から見える地球環境」、「津軽半島の生い立ちと断層」の3講演を行った。	
平成26年 5月10日(土) 午前(ペーパークラフト) 10:00~12:30 午後(講演) 13:30~15:00	弘前大学理工学研究科 准教授 片岡 俊一 弘前大学理工学研究科 講師 根本 直樹 弘前大学理工学研究科 助教 堀内 一穂		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学工学部 1号館 【対 象】 午前 小・中学生（小学校低学年は保護者同伴） 午後 高校生以上 【定 員】 午前 15名程度（要事前申込・応募多数の場合は申込順） 午後 20名程度 【参加費】 無料		午前 2名、 午後 約20名	弘前大学工学部地球環境学科、 弘前大学自然防災研究センター（予定）

名 称・開催日	講 師	内 容	
2014年度「化学への招待」 弘前大学一日体験化学教室		先端科学・技術の一端を担う化学に興味を抱いてもらえるよう、高校生（中学生）を対象に開催した。	
平成26年 8月 6日(水) 10:00~16:30	弘前大学理工学研究科 教授 澤田 英夫 弘前大学理工学研究科 教授 糠塚いそし 弘前大学理工学研究科 教授 阿部 敏之 弘前大学理工学研究科 准教授 喜多 昭一 弘前大学理工学研究科 准教授 川上 淳 弘前大学教育学部 教授 長南 幸安 弘前大学被ばく医療総合 研究所 教授 山田 正俊		

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 理工学研究科、教育学部 【対象】 高校生（中学生・一般も可） 【定員】 60名 【参加費】 無料	46名	日本化学会東北支部・弘前大学理工学研究科

名称・開催日	講師	内容
夏休みの数学2014		中学校や高等学校の数学の教科書に出てくる数学の世界のすぐ近くに面白い話題がたくさんあり、そのような数学の魅力を高校生や一般市民に紹介した。
平成26年8月7日(木) 平成26年8月9日(土)	弘前大学理工学研究科教授 中里 博 弘前大学理工学研究科助教 江居 宏美	

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学理工学部2号館 【対象】 中学校、高校の数学担当教員、一般市民、高校生 【定員】 両日とも40名 【参加費】 無料	33名	弘前大学理工学部

名称・開催日	講師	内容
楽しい科学		理工学部の実験室を小・中学生に開放し、教員や学生のていねいな指導のもとでいろいろな実験や実習を体験してもらった。
平成26年10月26日(日) 10:00~16:00	弘前大学理工学研究科 教員約15名	

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学理工学研究科 【対象】 小学生、中学生とその父母 【定員】 なし 【参加費】 無料	725名 （楽しい科学・サイエンスへの招待合わせて）	弘前大学理工学研究科

名称・開催日	講師	内容
サイエンスへの招待		理工学部で行っている最新の研究や社会のために役立つ研究の内容を、教員や学生がわかりやすく紹介した。また、いろいろな実験や実習の体験をとおして科学の面白さに触れてもらった。
平成26年10月26日(日) 10:00~16:00	弘前大学理工学研究科 教員約15名	

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学理工学研究科 【対象】 小学生、中学生、高校生、一般 【定員】 なし 【参加費】 無料	725名 （楽しい科学・サイエンスへの招待合わせて）	弘前大学理工学研究科

【農学生命科学部】

名 称・開催日	講 師	内 容	
親子体験学習「触れ合おう、人と自然と農業に」			
平成26年5月24日、 6月14日、9月27日、 10月18日、11月1日 (いずれも土曜日) 第1回目、第3回目及び 第5回目は、 9:30~15:30 第2回目及び第4回目は、 9:30~12:00	弘前大学農学生命科学部 附属生物共生教育研究セ ンター教員等	自然や農業との触れ合いを通じて、環境と食 物生産の関わりを学ぶプログラム。さまざまな 体験型学習のメニューが用意されており、講師 の指導を受けながら親子が一緒に挑戦するもの です。また、学区や学年の枠を超えて、参加し た子供たち同士が交流を深める場を提供しま す。	
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター金木農場及び藤崎農場 【対 象】一般（小学生とその保護者を対象としています。但し、保護者が2名以上の場合には、小学生と共に未就学児の参加も可能です。） 【定 員】先着25組（保護者1名につき、子供2人までとします。） 【参加費】5回分の参加費として、大人1名につき1,000円（子供は無料）		のべ241名 (申込60名)	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター

名 称・開催日	講 師	内 容	
公開講座「岩木川の水環境を学ぶ！」			
平成26年10月26日(日) 13:30~15:30	弘前大学農学生命科学部 地域環境工学科 教授 工藤 明 弘前大学農学生命科学部 地域環境工学科 教授 泉 完	1.「世界自然遺産白神山地が岩木川に果たす役割は？」 津軽平野を潤す岩木川は名実共に「母なる川」として、流域住民の生活に直接関わりを持っています。その水源である最上流部の白神山地にもたらされる降雨や流れ出る水の量と質より、下流河川の岩木川に果たす役割、又は及ぼす影響について考えて見ましょう。 2.「川の生態系を保全するための魚道を知っていますか？」 私たちは、農業用水や飲用水などに必要な水を川に堰をつくって取ります。ただ、せき止めてしまうとそこに棲んでいる魚などの行き来ができなくなります。そのために堰に魚の通路を設けます。この通路を「魚道」といいます。岩木川にある堰の魚道を例にしてその機能や魚道設計に必要な魚の泳力について学びましょう。	

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学農学生命科学部 302講義室 【対象】 一般市民 【定員】 70名 【参加費】 無料	31人	弘前大学農学生命科学部

名称・開催日	講師	内容
公開講座「リンゴを科学する」		主にリンゴ農家及びリンゴ関係者を対象として、リンゴの栽培方法、樹・果実の生理、病害虫の防除、土壌肥料、品種、流通、海外事情等についての話題をわかりやすく解説します。
平成26年11月29日(土)	弘前大学農学生命科学部 附属生物共生教育研究センター教員等	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 JAつがる弘前本店 3F ホール 【対象】 一般 【定員】 約150名 【参加費】 無料	105人	主催：弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 共催：弘前市

【地域社会研究科】

名称・開催日	講師	内容
津軽学公開講座 (あおもりリズム創発塾公開講座)		〈第1部〉 「今こそ、ねふた／ねふた」
平成26年11月28日(金)	学習院大学 教授 赤坂 憲雄 名古屋大学 教授 田中 重好 公益社団法人青森観光コンベンション協会 会長 奈良 秀則 立佞武多の館 館長 菊池 忠 黒石青年会議所OB 中田 伸一 企画集団ぶりずむ 代表 杉山 陸子 NHK エンタープライズ プロデューサー 菊池 正浩	〈第2部〉 「津軽学を語り、地域学のこれからを問う」

	フリーライター 永井 一顕 メディアプランナー 川島 大史 大学院地域社会研究科 客員研究員 三浦 俊一 大学院地域社会研究科 准教授 平井 太郎		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学創立50周年記念会館みちのくホール 【対象】 一般 【定員】 85名 【参加費】 無料	50名	【主催】 弘前大学大学院地域社会研究科・津軽に学ぶ会	

【白神自然環境研究所】

名称・開催日	講師	内容	
白神自然環境研究所セミナー			
平成26年 4月18日(金) 17:30～	弘前大学白神自然環境研究所 教授 石川 幸男 弘前大学白神自然環境研究所 准教授 中村 剛之 弘前大学白神自然環境研究所 助教 山岸 洋貴 ※その他の講師を予定	白神山地に関する生物、環境（気象・地象）、文化などについてセミナーを行う予定です。 5月以降の詳細は、ホームページ等 http://www.hirosaki-u.ac.jp/shirakami/ でお知らせいたします。	
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学創立60周年記念会館「コラボ弘大」8階 八甲田ホール 【対象】 どなたでも 【定員】 【参加費】 無料	45人	弘前大学白神自然環境研究所	

名 称・開催日	講 師	内 容	
白神自然環境研究所観察会		白神山地に関する生物、環境（気象・地象）、文化などに触れる観察会を行う予定です。 6月以降の詳細は、ホームページ等 http://www.hirosaki-u.ac.jp/shirakami/ でお知らせいたします。	
観察会「春の観察会～観察園を歩こう～」 平成26年 5月16日(金) 13:00～ ※6月以降の日程及び回数は未定です。	弘前大学白神自然環境研究所 教授 石川 幸男 弘前大学白神自然環境研究所 准教授 中村 剛之 弘前大学白神自然環境研究所 助教 山岸 洋貴 ※その他の講師を予定		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 西目屋村川原平 弘前大学白神自然環境研究所附属白神自然観察園 【対 象】 どなたでも 【定 員】 【参加費】 保険代として一人100円を当日徴収します。また、定員を設定して先着順になる可能性もあります。		25人	弘前大学白神自然環境研究所

名 称・開催日	講 師	内 容	
白神自然環境研究所シンポジウム		ひろだい白神レーダーの開設を記念したシンポジウムを開催し、気象レーダーを用いた白神山地生態系と青森県の気象災害の今後の研究について、また、地域の防災関係者と共に気象レーダーの活用について議論を行う。	
「ひろだい白神レーダー開設記念シンポジウム 一津軽の空を見守る新しい眼一」 平成26年 9月27日(土) 12:00～17:00 平成26年 9月28日(日) 9:30～12:00	弘前大学白神自然環境研究所 教授 石川 幸男 気象庁気象研究所 楠 研一 琉球大学理学部 准教授 山田 広幸 弘前大学農学生命科学部 教授 工藤 明		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学創立60周年記念会館「コラボ弘大」8階 八甲田ホール 【対 象】 どなたでも 【定 員】 【参加費】 無料		2日間で のべ 123人	弘前大学白神自然環境研究所 弘前大学理工学研究科寒地気象実験室

名 称・開催日	講 師	内 容	
白神自然環境研究所セミナー		重要な財産である生物情報の共有化の現状について理解し、青森県におけるネットワークづくりを考える	
「生物情報ネットワークを構築するためには」～青森県でみつけて、つないで、発信する～ 平成27年2月13日(金) 14:00～17:00	国立科学博物館 細矢 剛 福田 知子 神奈川県立生命の星・地球博物館 大西 亘 栃木県那須野が原博物館 多和田潤治 東京大学総合研究博物館 矢後 勝也 青森市森林博物館 辻村 収 弘前大学白神自然環境研究所 准教授 中村 剛之		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学創立60周年記念会館「コラボ弘大」8階 八甲田ホール 【対 象】 どなたでも 【定 員】 【参加費】 無料		100人	弘前大学白神自然環境研究所

【附属図書館】

名 称・開催日	講 師	内 容	
附属図書館リニューアルオープン記念講演会 「演劇から考えるコミュニケーション」		附属図書館リニューアルオープンを記念し講演会（ワークショップも含む）を開催した	
平成26年12月2日(火)	劇作家・演出家 平田オリザ		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学創立50周年記念会館みちのくホール 【対 象】 どなたでも 【定 員】 【参加費】 無料		約150名	弘前大学附属図書館

【COI研究推進機構】

名 称・開催日	講 師	内 容	
第1回弘前大学COI特別講演会		健康寿命を延ばすための健康づくり・街づくり ～名古屋大学における取り組みを中心に～	
平成26年 4月28日(月) 14:00～15:30	名古屋大学総長補佐 医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援 センター教授 COI構造化チーム委員 水野 正明		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学大学院 医学研究科 基礎大講堂 【対 象】 一般市民・学生・医療関係者・大学・企業・ 研究機関等 【定 員】 制限なし 【参加費】 無料		約70人	【主催】 弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第2回弘前大学COI特別講演会		京都大学のCOI戦略 ～ながはまコホートと地域に 根ざした未来型健康づくりの試み～	
平成26年 7月 8日(火) 15:00～16:30	京都大学大学院医学研究 科 附属ゲノム医学セン ター長 松田 文彦		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学大学院 医学研究科 基礎大講堂 【対 象】 一般市民・学生・医療関係者・大学・企業・ 研究機関等 【定 員】 制限なし 【参加費】 無料		約80人	【主催】 弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第3回弘前大学COI特別講演会		東北大学のCOI戦略 ～さりげないセンシングと日常人間ドックで 実現する理想自己と家族の絆が導くモチ ベーション向上社会の創生～	
平成26年 8月 4日(月) 13:30～15:00	東北大学COI拠点 プロジェクトリーダー (株式会社 東芝 ライフ サイエンス部 部長) 高山 卓三		

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学大学院 医学研究科 基礎大講堂 【対象】 一般市民・学生・医療関係者・大学・企業・研究機関等 【定員】 制限なし 【参加費】 無料	約80人	【主催】 弘前大学COI研究推進機構

名称・開催日	講師	内容
第4回弘前大学COI特別講演会		
平成26年9月24日(水) 13:30~15:00	東京大学COI拠点 機構長 (三菱化学テクノロジーサーチ特別顧問) 池浦 富久 東京大学COI拠点 副機構長 (テルモ株式会社理事) 野尻 知里	東京大学のCOI戦略 ~若者と共存共栄する持続可能な健康長寿社会の実現~
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学大学院 医学研究科 基礎大講堂 【対象】 一般市民・学生・医療関係者・大学・企業・研究機関等 【定員】 制限なし 【参加費】 無料	約80人	【主催】 弘前大学COI研究推進機構

名称・開催日	講師	内容
第5回弘前大学COI特別講演会		
平成26年10月20日(月) 15:00~16:30	GEヘルスケア・ジャパン株式会社 執行役員 技術本部長 星野 和哉	GEのイノベーションと日本の役割
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学大学院 医学研究科 基礎大講堂 【対象】 一般市民・学生・医療関係者・大学・企業・研究機関等 【定員】 制限なし 【参加費】 無料	約70人	【主催】 弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第6回弘前大学COI特別講演会		地域発オープンイノベーションの基盤作りに向けて	
平成26年11月11日(火) 13:30~15:00	Center of Open Innovation Network for Smart Health (COINS) プロジェクト統括 (東京大学 大学院薬学系 研究科・特任教授) 木村 廣道		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学大学院 医学研究科 基礎大講堂 【対 象】 一般市民・学生・医療関係者・大学・企業・ 研究機関等 【定 員】 制限なし 【参加費】 無料		約70人	【主催】 弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
弘前大学COIイノベーション・サミット		COI拠点のさらなる加速化のため、県民・国民の健康寿命延伸とQOL(生活の質)・GNH(幸福度)向上に向けて、新たな産業創出(社会実装)のあり方などについて徹底討論するため、産学官の関係者(トップ)が一同に会するサミットを開催します。	
平成27年1月30日(金) 13:00~17:00	COI STREAM ガバニング 委員会委員長 東京大学前総長/三菱総合 研究所理事長 小宮山 宏		
	COI STREAM ビジョン 1 ビジヨナリーリーダー 協和発酵キリン前社長/ (公財)加藤記念バイオサイ エンス振興財団理事長 松田 譲		
	GEヘルスケア・ジャパン(株) 代表取締役社長兼CEO 川上 潤		
	九州大学大学院医学研究 院 環境医学分野 教授 清原 裕		
	京都府立医科大学 COI-T (PL) (株)ベネッセスタイルケア 執行役員 西日本エリア 事業本部長 奥村 太作	他	

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 ホテルナクアシティ弘前・プレミアホール 【対象】 一般市民・学生・医療関係者・大学・企業・研究機関等 【定員】 300名（先着） 【参加費】 無料	約450人	【主催】 弘前大学（COI研究推進機構）・青森県・弘前市・青森県医師会・弘前地区地域健康・医療推進協議会・(財)21あおもり産業総合支援センター・ライフイノベーションネットワーク青森（LINA）・（地独）青森県産業技術センター・ひろさき産学官連携フォーラム他 【共催】 （独）科学技術振興機構

【事務局】

名称・開催日	講師	内容	
弘前大学八戸サテライト「八戸地域学講座」			
平成26年12月3日 ～平成27年2月25日 の毎週水曜日 （ただし、12月24日、12/31、1/7は休講、第8回目については水曜日が祝日のため、2月12日(木)開講） 15:00～17:00	第1回 八戸市博物館館長 工藤 竹久 第2回 八戸歴史研究会会長 三浦 忠司 第3回 八戸市史編纂室職員 斎藤 潔 第4回 青森県立三戸高等学校教員 滝尻 善英 第5回 八戸都市計画審議会審議員 小瀧 勇 第6回 八戸漁業指導協会会長 熊谷 拓治 第7回 八戸工業高等専門学校名誉教授 本田 敏雄 第8回 八戸市史編纂委員 島守 光雄 第9回 元八戸市経済部次長 山内 輝雄 第10回 八戸サテライト客員教授 高橋 俊行	八戸の歴史や文化、トピックスなど、いわゆる「八戸学」を学ぶことにより、八戸地域の将来ビジョンをもって同地域のリーダー的役割を務める人材を育成することを目的として開講した。	
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会場】 八戸サテライト 【対象】 市民一般 【定員】 24名 【参加費】 無料		第1回 23名 第2回 21名 第3回 19名 第4回 18名 第5回 16名 第6回 18名 第7回 22名 第8回 18名 第9回 18名 第10回 23名	弘前大学八戸サテライト

名 称・開催日	講 師	内 容	
弘前大学八戸サテライト短命県返上「健康講座」			
平成27年 3月28日(土) 14:00～15:30	医学研究科長 社会医学 講座 教授 中路 重之	男女ともに平均寿命が全国最下位の青森県において、青森県南地域の住民を対象に、同講座を通して健康の大切さを幅広く理解してもらうとともに、弘前大学と青森県南地域とのさらなる連携の推進を図った。 テーマ「青森県の平均寿命の現状と背景&健康教養」	
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 八戸商工会館 4階 大会議室 【対 象】 青森県南地域の住民 【定 員】 100名 【参加費】 無料		107名	弘前大学八戸サテライト

名 称・開催日	講 師	内 容
2014年度 弘前大学シニアサマーカレッジ		
平成26年 9月 7日(日) ～平成26年 9月10日(水)	<p>1日目 ・エッセイイスト・弘前リードマン 片山 良子 ・広瀬矯正歯科クリニック院長 広瀬 寿秀</p> <p>2日目 ・医学研究科長・教授 中路 重之 ・病院長 藤 哲 ・医学研究科准教授 花田 裕之 ・医学研究科教授 加藤 博之</p> <p>3日目 ・白神自然環境研究所教員 教授 石川 幸男 准教授 中村 剛之 助教 山岸 洋貴</p> <p>4日目 ・弘前市立博物館長・弘前大学名誉教授 長谷川成一 ・弘前市公園緑地課参事(桜守) 小林 勝 ・弘前医療福祉大学・教授 齋藤三千政</p>	<p>全国の50歳以上のシニア層を対象とした地域滞在型学習プログラムを提供することにより、本学の持つ知を広くアピールするとともに様々な地域文化・地域人材を活用することで、地域振興をも視野に入れた学習プログラムを本学から発信することを目的にする。</p> <p>学内外の講師・教員等が弘前大学並びに弘前市・青森県の特性を中心とした講義（1講義90分）を行った。</p>

Ⅲ. センター関連規則等

1. センター関連規則

(1) 弘前大学生涯学習教育研究センター規程

(平成16年4月1日制定)
規程第144号
最終改正：平27.3.20

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第1号。以下「管理運営規則」という。）第6条第2項の規定に基づき、弘前大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という。）に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、学内共同教育研究施設として、生涯学習に関する教育（医学及び保健に関することを含む。）及び研究を行い、弘前大学（以下「本学」という。）の教育研究の進展と地域における生涯学習の振興に資することを目的とする。

(業務)

第3条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 生涯学習に関する教育内容及び教育方法の研究
- (2) 社会人を対象とする公開講座等の生涯学習事業の実施
- (3) 生涯学習指導者の養成
- (4) 生涯学習に関する情報の収集及び提供
- (5) 生涯学習に関する相談事業
- (6) 生涯学習に関する調査・研究報告書等の刊行
- (7) メディカルコミュニケーションセンターの業務に関すること。
- (8) その他生涯学習に関すること。

(職員)

第4条 センターに、次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 専任教員
- (3) その他必要な職員

(センター長)

第5条 センター長は、センターの業務を掌理する。

(専任教員の選考)

第6条 センターの専任教員の選考は、国立大学法人弘前大学教員の資格及び採用等の方法に関する規程（平成16年規程第40号）第10条第2項で別に定める委員会の議を経て、学長が行う。

(センター協力教員)

第7条 センターに、センターが行う事業を円滑に実施するため、センター協力教員を置くことができる。

- 2 センター協力教員の任期は、担当する業務が終了するまでの期間とする。
- 3 センター協力教員は、学長が任命する。

(運営委員会)

第8条 センターの管理運営に関する事項を審議するため、弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会の組織及び運営については、別に定める。

(事務)

第9条 センターの事務は、研究推進部社会連携課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成16年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年2月9日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年5月28日から施行し、改正後の規定は、平成21年4月1日から適用する。

附 則（平成22年5月17日規程第53号）

この規程は、平成22年5月17日から施行する。

附 則（平成23年7月28日規程第68号）

この規程は、平成23年7月28日から施行し、改正後の規定は、平成23年5月20日から適用する。

附 則（平成25年4月19日規程第74号）

この規程は、平成25年4月19日から施行し、改正後の規定は、平成25年4月1日から適用する。

附 則（平成26年5月16日規程第61号）

この規程は、平成26年6月1日から施行する。

附 則（平成27年3月20日規程第48号）

この規程は、平成27年3月20日から施行する。

(2) 弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会内規

(平成16年4月1日制定)
(最終改正：平25.4.19)

(趣旨)

第1条 この内規は、国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第1号）第95条及び弘前大学生涯学習教育研究センター規程第8条の規定に基づき、弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(組織)

第2条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センターの専任教員
- (3) 各部局から推薦された教員各1名
- (4) 学長が指名する教員以外の職員1名
- (5) その他委員長が必要と認めた職員

2 前項第3号の委員は、学長が任命する。

(委員の任期)

第3条 前条第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

2 前項の委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、会議を招集し、その議長となる。

3 運営委員会に副委員長を置き、委員長が指名する委員をもって充てる。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 運営委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

2 運営委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員の代理出席)

第6条 委員に事故があるときは、当該委員の指名した者が委員として代理出席することができる。

(委員以外の出席)

第7条 運営委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第8条 運営委員会に専門的事項を調査し、又は企画、立案若しくは実施をするため、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会の名称、組織及び運営については、運営委員会が別に定める。

(庶務)

第9条 運営委員会の庶務は、研究推進部社会連携課において処理する。

(その他)

第10条 この内規に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、運営委員会
が別に定める。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成16年10月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成17年10月28日から施行し、平成17年4月1日から適用する。

附 則

この内規は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

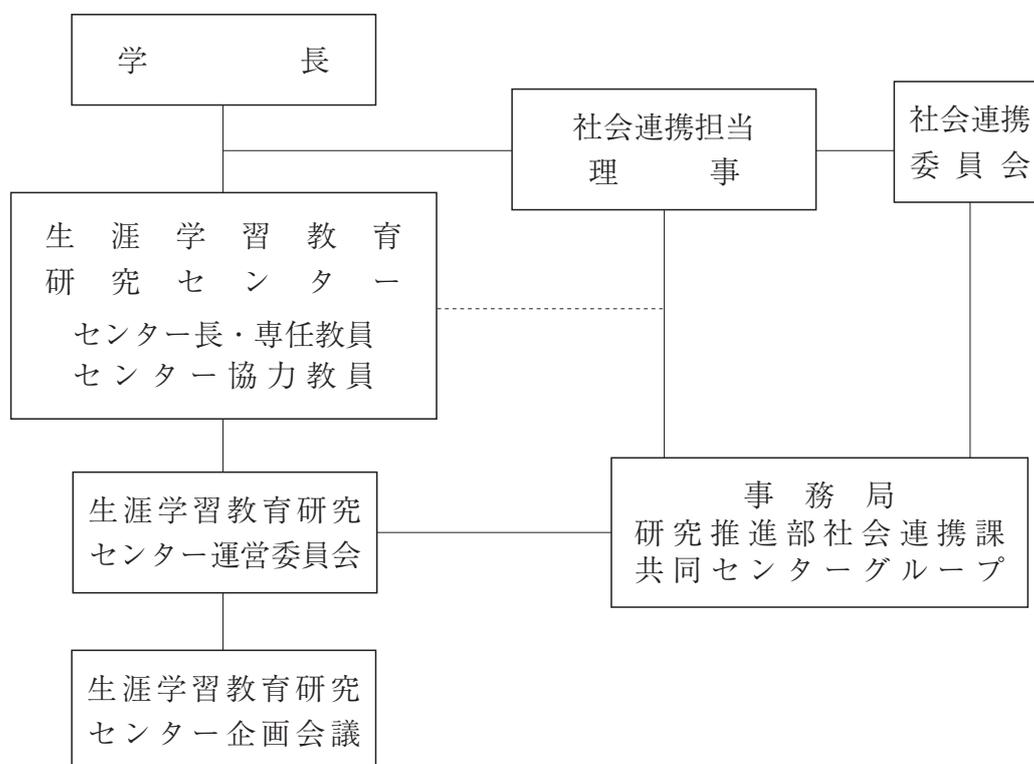
この内規は、平成21年4月1日から施行する。

附 則 (平成25年4月19日)

この内規は、平成25年4月19日から施行し、改正後の規定は、平成25年4月1日から適用する。

2. 機構・組織

センターの運営は、各部局から推薦された委員、学長が指名する教員以外の職員1名、センター長並びに専任教員が構成員となった「弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会」で、全学的な視野から検討されることになっています。



○生涯学習教育研究センター運営委員会

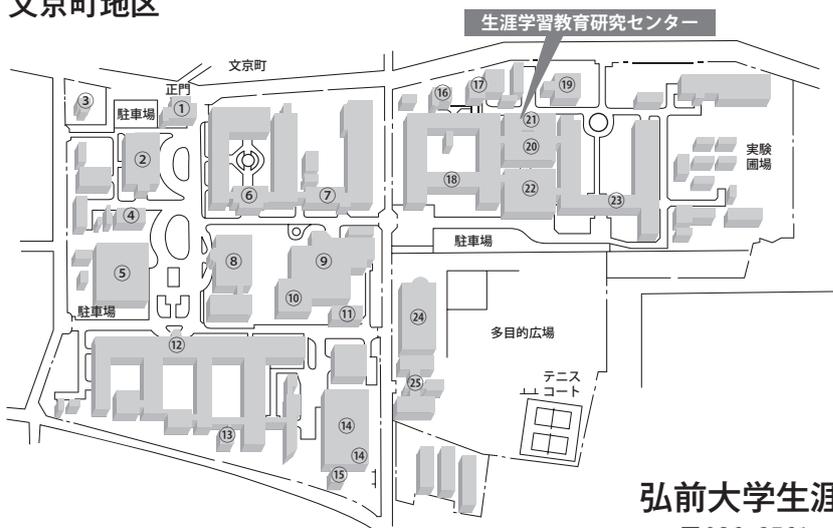
生涯学習教育研究センター	教授	曾我亨
生涯学習教育研究センター	准教授	藤田昇治
生涯学習教育研究センター	講師	深作拓郎
人文学部	准教授	小野寺進
教育学部	教授	大坪正一
医学研究科	教授	廣田和美
保健学研究科	講師	樽澤孝悦
理工学研究科	講師	岡崎功
農学生命科学部	准教授	大川浩
研究推進部社会連携課	課長	山田修平

○センター協力教員

人文学部	准教授	金目哲郎 (26.6.1~28.3.31)
教育学部	准教授	小瑤史朗 (26.6.1~28.3.31)
農学生命科学部	准教授	石塚哉史 (26.6.1~28.3.31)
白神自然環境研究所	准教授	中村剛之 (26.6.1~28.3.31)

3. 地図・連絡先

文京町地区



- | | | |
|-----------------------|-----------------|---------------------|
| ①案内所(守衛所) | ②事務所 | ③旧制弘前高等学校
外国人教師館 |
| ④保健管理センター | ⑤創立50周年記念会館 | ⑥総合教育棟 |
| ⑦人文学部校舎 | ⑧附属図書館 | ⑨学生食堂 |
| ⑩大学会館 | ⑪合宿所及びサークル共用施設 | ⑫教育学部校舎 |
| ⑬教育学部附属
教育実践総合センター | ⑭第一体育館 | ⑮弓道場 |
| ⑯地震火山観測所 | ⑰総合情報処理センター | ⑱理工学部1号館 |
| ⑲遺伝子実験施設 | ⑳附属コラボレーションセンター | ㉑農学生命科学部校舎 |
| ㉒創立60周年記念会館
コラボ弘大 | ㉓理工学部2号館 | |
| ㉔第二体育館 | ㉕武道館 | |

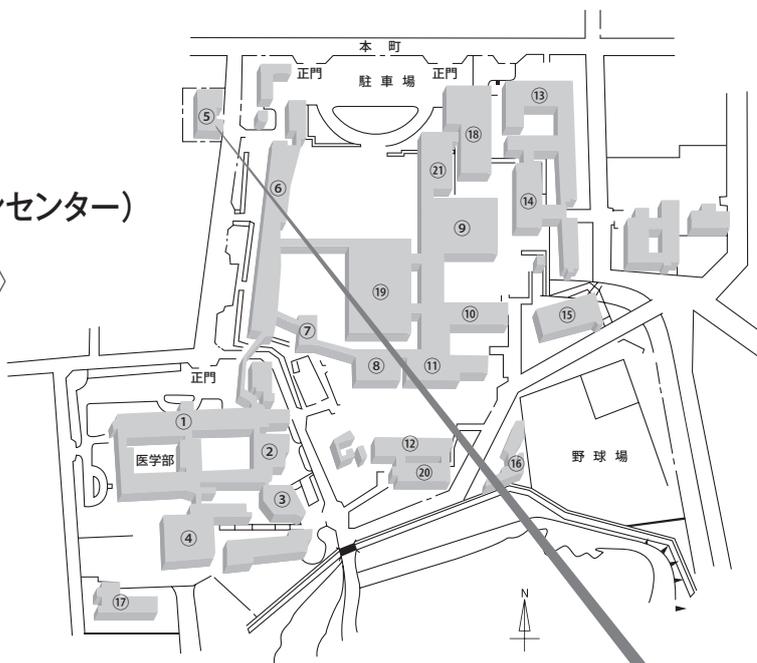
弘前大学生涯学習教育研究センター

〒036-8561 弘前市文京町3番地
TEL (0172) 39-3146 (直通)
FAX (0172) 39-3146

本町地区

分室(医学部コミュニケーションセンター)

〒036-8203 弘前市本町40-1
TEL (0172) 39-5240 (直通)
FAX (0172) 39-4056



- | | | |
|--------------------------|-------------|------------------------------|
| ①医学研究科 | ②附属図書館医学部分館 | ③基礎講義棟 |
| ④附属動物実験施設
アイソトープ総合実験室 | ⑦臨床講義棟 | ⑧エネルギーセンター |
| ⑥臨床研究棟 | ⑩第二病棟 | ⑪第一病棟 |
| ⑨中央診療棟 | ⑬一般管理棟 | ⑭保健学研究科 |
| ⑫一般管理棟 | ⑮体育館 | ⑯医学部会館 |
| ⑮体育館 | ⑰外來診療棟 | ⑱ひろだい保育園
(附属高度先進医学研究センター) |
| ⑲外來診療棟 | | |
| ⑳高度救命救急センター | | |

事務局

研究推進部社会連携課 共同センターグループ

〒036-8561 弘前市文京町3番地
TEL (0172) 39-3914
FAX (0172) 39-3919

編集後記

『年報』の発行にあたってこの1年間を振り返ると、様々な出来事が脳裏に去来する。昨年12月の総選挙、今年4月の統一地方選挙、そして「集団的自衛権」の閣議決定から急ピッチで進められる法制化の動き等々、政治的な場面での「右傾化」には強い警戒心を抱かざるを得ない。マスコミなどでも、「日本社会の根本的な仕組みの変更が今なされようとしている」、と警鐘を鳴らしている例もあるが、必ずしも「大きな声」にはなっていないようだ。何年か後、「あのときが歴史の分岐点だった」と後悔することがなければ良いのだが…。

今回の『年報』では、生涯学習・大学開放に関わる論文1編と、NPO「harappa」の活動を紹介した実践報告1編が収録されている。また、生涯学習教育研究センターなどの事業がとりまとめられている。社会教育・生涯学習に関わりを持つ人をはじめ、多くの人々に読んでいただければ幸いである。 (藤田)

発行 平成 27 年 5 月 29 日

弘前大学生涯学習教育研究センター 年報 第 18 号

発行 弘前大学生涯学習教育研究センター

〒036-8561 弘前市文京町3番地

☎ (0172) 39-3146

印刷 やまと印刷株式会社

〒036-8061 弘前市神田4丁目4-5

☎ (0172) 34-4111

ANNUAL REPORT
CENTER FOR RESEARCH AND EDUCATION OF LIFELONG LEARNING
HIROSAKI UNIVERSITY
NO.18, 2015

CONTENTS

Academic Articles

Cooperation and Lifelong Learning:
From the View Point of Career Education and Open University
FUJITA Shoji1

Practice report of “*Children Movie Class @ Hirosaki 2014*”
OTA Shoko13

Activity Reports: Center for Research and Education of Lifelong Learning21

The Faculties and Other On-campus Organizations57

Rules and Organization73
